

あの頃の私にとって《思い出》という言葉は、特別だった。

部活動の《思い出》、体育祭の《思い出》、修学旅行の《思い出》、親友との《思い出》、初恋の《思い出》……。そんな《思い出》が、《思い出》らしい《思い出》が、あの頃の私には、これっぽっちも無いように思えた。そのことを感じたとき、私の焦りがどれほどであったか、想像して欲しい。なんとなく、漂うように生きてきた。そのツケが回ったのだと思いつき、あの頃の私は生きた心地もしないくらいに焦っていた。

振り返ってみると、主体性に乏しかったのが原因なのだろう。海に行こうと言われても、とくに考えず了承し、やっぱり山にしようと言われても、それでもとりあえず了承する。もしも先約があるのなら、友人の申し出を断ったり、断らなかつたりする。そしてそこにさえ、自分の明確な意思など、ありはしないのだ。

目的はたいてい、特になし。それ自体は特別おかしなことではない。と、思う。どうせ、私のまわりも似たようなものだった。一部のリーダー格の同級生は声高に周囲を先導するけれど、その周囲はなんとなく、それを自分の意見であるかのように生きている。

ただそれに安心していた私は、重大なミスを犯してしまった。少なくとも、私のまわりの人達には好みの方向性はあつたようで、何らかの意見を肯定していたのだ。そしてそこには、ある程度の一貫性があつたことに、私は気付かなかつた。クラスでも大体そうだ。小学生の頃も、中学生の頃も、男子も、女子も、仲の良いグループというものがある。中学三年のあの頃、私のクラスには九つのグループがあつて、私以外はみんなどれかに所属していた。私だつて入ろうとすればどれかのグループに入れただろう。でも、私はどのグループに属することもなかつた。結局どこかのグループの意見を肯定し続けることを避けた私は、孤立を選ぶわけでもなく、グループの間を行ったり来たり、尻尾もがれた蜻蛉のような不安定さで（あれは正確には腹だった気がするが）、ふらふらと漂つてすごしていた。

そんなことから、「これは！」と思える《思い出》を、私は作れなかつたのだ。そう思い始めた頃には、すでに色々なことが手遅れで、私は自分の《思い出》のあまりの軽さで、魂が飛んでいきそうだった。

ああ《思い出》が欲しい！

そんなことばかり考えて、焦燥に駆られる日々。まるでそれが高校生になるために必要なひいては大人になるために必須な、大切な儀式であるかのように、ただ闇雲に、追い求める。その言葉が何を意味するのかは、考えることもなく。

大人ではないけれど、子供ともいえなくなってきたような、あの頃。

今もまだまだ大人と言えるか怪しいと思うけど、あの頃はどちらかといえば子供と言えなくなってきたという意識が強くて、宙を漂うような不安定さは今とはまたひと味違うものだった。

ただ生きているだけで、どこかへ流れついてしまいたいような、そんな不安でもきつと、一人ではどこへも流れつかなかったのだと、今は思う。きつとこれからも、誰かと出会い、別れる中で、何かを贈り、贈られて、そうして大人になつていく。今はただ、そんな気がしている。

夏期講習も終わり、思い出作りのために一人合唱コンクールに燃えていた私。その目の前に舞い降りた彼女も、私を大人にしてくれた一人なのだ、私はよく、あの頃を思い出す。

2

放課後の練習は、最高に憂鬱だった。

誰も協力してくれないのが、信じられない。

「中三でしょ！ みんなで一生の思い出を作ろうよっ！」

と、黒板を背に、教卓に乗り出す勢いで叫ぶ私に、

「だるー。どうせみんな歌ってないじゃん」

「そうだよ。静佳^{しずか}。みんながそろってから歌わないと、合唱にならないでしょ？」

「わたし、そもそもまだ歌詞憶えてないんだよねー」

「そんなことより静佳、この前借りたゲームなんだけど、どうしても四章が攻略できないだよ。コツ教えてくれない？」

という調子。辛うじて教室には十数名の生徒が残ってくれたけど、耳を貸してくれるのはその中でも一部のこいつらだけ。

中三最後のビッグイベントだというのに、まさかの事態だった。

五月の修学旅行は、《仲良しの班員》と一緒にだった。が、《仲良し》だったのは私以外の班員同士であり、微妙な疎外感と、学校行事という窮屈さの中で、数日を過ごして終わった。

六月は体育祭だ。陸上部の私は当然大活躍！ ……することもなく、誰でも出場できる五十メートル走で三位という、陸上部としては微妙な結果。そもそも私、長距離選手なのに…。

七月。私の陸上人生は、最後の試合も軽く敗退。誰からも惜しまれることもなく退部。

八月の夏休み？ そんなもん、灼熱の太陽と夏期講習の中で燃え尽きたわっ！

——そして暴力的だった陽光が、少しだけ大人びてきたような、九月。

正直、《思い出》というものに一切関心を抱かず自分が中学生生活を送ってきた事実が、このときは不思議でたまらなかった。中一だったら入学式に校外学習にスキー教室。中二は職

場体験に大学体験に再びの校外学習があった。そして、毎年恒例の体育祭に合唱コンに球技大会。外部から講演者を招いての特別授業とか、創立記念日のコンサートだってあった。一年から続けてきた陸上部の大会まで含めたら、毎月のように思い出を作る機会があったのだが、それが逆に私の目を曇らせてきたのだろう。

ある日、面接練習を受けた私はそのことを思い知らされ、顔面蒼白となった。

『あなたの中学生生活で一番の思い出はなんですか？』

なーんだ。よゆうーじゃん。そんなの……えっと、えっと、えっとお。

『と、とも、ともだ、ち………、陸上で頑張りましたっ！』

心臓が激しく鼓動し、しかし顔からは一瞬で血が抜けていく。そんな、初体験の奇妙な感覚。

ようするに、死ぬかと思った！

推薦なんか受けないのに、強制的にやらされた面接練習。その練習で、死ぬかと思った。面接が終わった後で、同じ質問をされたなら「面接練習で死にかけたことですよっ！」って答えてやろうかと思っただくらい、死ぬかと思った。

『陸上で頑張りました』……と、答えたことに、面接官役だった校長先生はにっこり頷いてくれた。が、その笑顔がまた私の心を抉った。だって、『〇〇部での頑張った日々が、私の一番の思い出です』という回答は、直前に面接対策用に配られたパンフレットに書かれていた言葉だし、私の言ったそれさえも、例文の一部分にすぎなかったのだから。

つまり実のところ、私に中学の思い出なんて何もなかったんだ。

私の中学生活は、空っぽだったんだ。

その事実を、思い知らされた。

だから、三年生の二学期となり、受験の関係で球技大会が開催されなくなった時点で、合唱コンクールは私に残された最後の希望なのだ……というのに、

「みんなが歌わなくても、せめてトモちゃんだけは歌って」

「チサト、ここに集まってくれた人達だけでもなんとか合唱の形にはなるから頑張ろうよ」

「まだみんなも歌詞憶えてないと思うから、ナツも頑張ろう。私の教科書でよければ貸すから」

「神崎。四章で詰む程度なら、ゲームやめちゃえ」

教室に残る生徒の中で、私の声に応じてくれたのは、この四人だけだった。

この四人は、私と仲の良い友達だ……とは思う。だけど、私は《中学生活での思い出》として、彼らを挙げることはできないと思っていた。

トモちゃんと一番仲がいいのはチサトだ。ナツは三組の聡美さんと一番仲が良い。神崎。

こいつは私と小学生の頃からのゲーム仲間だが、特別仲がいいわけでもない。この頃の彼からは『俺には仲の良い女子の友達がいるんだぜ！』という、社会的にはどーでもいーステー

タスのために、私につきまともっているような気配さえ漂っていた。

誰にだって普通、特別仲の良い友達がいる。

誰か一人に絞れなくても、かけがえのない友達というのがいる。

世間ではそれを、親友とかいうらしい。

そしてこの頃ようやく気付いたのは、私にはそんな友達が一人もいないという事実だ。

その残酷な事実を私に教えてくれたのも、にこにこ笑った校長先生だった。

だから、私は中三の合唱コンに全てをかけていた。特別仲の良い友達は作れなかったかもしれないけど、陸上部では全然結果を残せなかったかもしれないけど、大人になった自分に、胸を張れる中学の思い出を、一つでいいから残したかったのだ。

先生は『記録に残らなくても、記憶に残るものにしよう！』なんてキレイゴトを言っていたけど、記録に残らないものが記憶に残るとは思えない。だからもう、金賞を取るしかない！

——と、意気込んだ私だが、実を言えば、私は合唱コンの実行委員でもなければ、音楽係でもなく、伴奏者でもなければ指揮者でもない。合唱部や吹奏楽部なんかに入っているわけでもなく、それどころか、パートリーダーでも審査員でもない。当然ながら、思いつきで『合唱コンを一生の思い出に！』と目論む私の正体は、ただの一般生徒であった。

「ねえ、静佳。伴奏者じゃないじゃ練習無理じゃない？」

「実行委員もないし、CDデッキも借りて来れないじゃん」

「だいたい三週間も前から放課後練習って……ねえ？」

「それより静佳、今日俺の家来てくれるよな？ 四章の攻略。頼むよお」

つくづく、似合わないことをしていると思った。

「ああもう！ わかったわ。じゃあ明日。CDは私がなんとかするから。明日練習ねっ！ 今日解散っ！ それと神崎、あんたの家なんか行かないわよっ！」

私の言葉を待ってたかのように、四人は早々に帰り支度を始める（一人は不服そうだが）。なんとなく教室に残っただけで、私の話にも耳貸さなかった生徒に至っては、思い思いの行動を続けており、解散という言葉も届いているか危うかった。

いたたまれなかった。もう一秒だって、この場に立っていられないほどだった。

誰とも深い付き合いがなかったし、人前に立ってまとめるようなタイプでもない。だから当然と言えば当然だけど、放課後練習初日にして、私は自分のリーダーシップのなさに絶望した。

そして何より、そんな主体性のなかった私が無理して前に立つ姿を見て、いや、見ようとすらしないクラスメイト達が信じられなかった。

泣くもんか。この程度で。

ざりつと音が鳴るほど奥歯を食いしばり、鞆をひったくるようにして教室から逃げ出す。

——まあ、普通泣かないよな。この程度で。そう思う。

でもだからこそ、さっきの醜態を見せてしまったクラスメイトには、顔を見られたくなかった。泣いちゃあいたいと思うけど、どうせ歪んでへんてこな顔になってるだろうから。

そんなことを考えていたからだろう。一人、校舎を彷徨うことにした私の足は、教室から離れると、クラスメイトの目指すであるう昇降口には向かわず、外灯に集まる羽虫のように、屋上の光を目指していた。

屋上の扉には『立ち入り禁止』と書かれた紙が貼られていた。が、鍵は内側から誰でも開けられる。誰でも鍵が開けられるのに立ち入り禁止が成り立ってるなんて、我が母校は平和なんだなーと感心しながらも、その禁止事項を自分が侵すことに、たいした躊躇はなかった。

扉の向こうは、秋の空だった。

高く澄みわたった空は、どことなくよそよそしく、その距離感が私には心地いい。うっすらと赤に染まり始めた空には、柔らかな羽根を思わせる巻雲が点々としていた。なんで空が高く澄んで見えるのか。なんで昼は青かった空が、夕方は赤いのか。夏期講習をほどほどに頑張った私は、ついそんなことを思い出しそうになったが、頭の中からそれらを締め出した。私は空の高さをもっと感じようとして、フェンスへと近付く。が、校庭に見える生徒の姿にはっとする。流石に屋上に出ているところを見られたらまずいと思い直し、私は入口近くへ引き返すと、入口の前にある段差に腰を下ろした。

ふと気付くと、他クラスの練習が、屋上まで響いてきていた。入口から見える校舎の中は、屋上の明るさとは対照的で、黒々とした洞ほらあな穴のようだったが、そこから流れ出す音は、色鮮やかに煌めき、私の元までおしよせてくる。

時間を持て余してしまった私は、なんととはなしに目を瞑り、しばしその音の中を漂った。まだまだ未熟な音の波が、速く、遅く揺らめいている。止まったり、渦を巻いたり、ぶつかったり、馴染んだり……そんなことを繰り返しながら、無秩序だった音の並びに、少しずつ、だが確実に、秩序が生まれていくような、そんな感じ。

私はその《練習中の音楽》を聴いて、ああ、なんかいいなと思った。

発表当日に、完成した合唱を保護者は聴きに来れるけれど、躓きながらもゆっくり進んでいく、この成長する音楽を聴けるのは、学校にいる者だけが楽しめる、最高の贅沢だ。しかも、今この屋上には、いくつものクラスの奏でる音が、響き渡っている。

そして思った。

なんで私のクラスの人達は練習してくれないのだろう？

こんなに合唱の練習を素晴らしいと思えるのは、私だけなのだろうか？

——たぶん、そうなのだろう。

みんながみんな、合唱の練習が嫌いとはまでは思わないけど、きっと好きな人は少ないのだろう。去年までの私だってそうだったのだから、私がみんなを責めることはできない。

でも、だったら私はどうすればいいんだろう。

どうすれば、みんなと一緒に歌ってくれるんだろう。

「あんたも聴きに来たの？」

不意に、頭の上から声が落ちてきた。私はその言葉の主を探すため、目を開く。

「いいよね、ここ。誰にも邪魔されないで練習聴けて……って、あたしが邪魔しちゃったか」

屋上の入口の更の上。そこにある貯水槽に彼女は腰掛けていた。目があうと手を軽く上げ、私に笑いかけてくる。

「とうっ！」と、わざとらしいかけ声を発すると、彼女は貯水槽から飛び降り、そのまま勢いを殺すことなく、私と同じ高さまで二度目の跳躍を果たす。台詞染みかけ声に負けぬ、見事なジャンプの演技。そしてそれを追うように、彼女の長い髪が波打った。

「あ、あぶ、あぶ！」

ない！

「へーき、へーき」

私に向かって、手をひらひらさせる。

「ふ、ふふふ、ふ」

「ふ？」

「不良っ！」

「ちよっ！ あんただって屋上でてるじゃん」

そりゃそうだ。と、納得したけれど、それでも私の彼女に対する第一印象は《不良》だった。

ずば抜けた高身長と、さっきのジャンプの身体能力。

私もクラスの女子の中ではけっこう背が高いけど、彼女は私より頭一つ近く高い。スレンダーで、ぱっと見ただけでもわかるような、引き締まった体付き。そしてなにより彼女の身のこなしは、常識の制御から外れた勢いを持っていた。単純な私が「屋上に出るのはルール違反」とか、そんな理屈を飛ばして、彼女を《不良》と感じ取ってしまうほどに。

「で、でも……あんな目立つところにいたら見つかる……かも」

「だいじょぶだって、目立つところの方が案外見つからないもんだよ」

そう言いながら、彼女は私の隣に腰を下ろした。彼女は髪を染めてるわけでもない。ただ、腰までとどこうかという黒髪を、束ねることなく振り乱たような姿は野獣のようで、そこがまた、なんとも《不良》らしかった。制服を改造してるといふこともなく、強いていえばスカートの下に体育の短パンを穿いてたところが校則違反というくらいだった（そうでなければ、あんなところから飛び降りるのは露出狂の一種だが）。

「で、あんたも聴いてたの？ 合唱の練習」

「う、うん」

それが目的で屋上に来たわけではなかったけれど、私は彼女に話を合わせた。

「いいよね、練習中の合唱。録音して聴いてみると『下手くそ!』っていつてやりたくないくらい酷いもんだけど、こうして聴いていると、青春だなんて思えてこない?」

「……うん」

それは凄く共感できた。

「だよー。だからあたし、練習サボってここに来ちゃった」

「……………」

それは凄く共感できない。

「まあ、クラスのみんなも私には期待してないみたいだしさ」

「や、やっぱり……不良?」

「だから違うっての」

彼女は手を頭の横にあげ、なんとも演技らしく、やれやれと首を振る。

「あんたこそどうなのさ? 逃げた?」

「いや、その——」

確かこの時、私は迷ったと思う。

こんな出会ったばかりの得体の知れない生徒に、個人的な悩みを打ち明けてしまっているのかと迷った。それに、上履きの色でわかるが、彼女は私と同年代だった。そんな相手に、自分のクラスの事情を漏らすのも、クラスメイトを裏切るみたいで、後ろめたさがあった。

それでも結局、私は彼女に事の経緯を打ち明けようと思った。

彼女にだったら、打ち明けても平気だろうと思えた。

練習中の合唱を好きだと思える彼女なら、純粋に合唱の悩みを聴いてくれる。少なくとも、このときの私には、そう思えた。

3

彼女の名は、番匠虎狐ばんじょうこという。

「八重静佳、ね。あんたの名前。《いにしへの奈良の都の八重桜》の《八重》に、《樹静かならんと欲すれど風やまず》の《静》。それに《佳人薄命》の《佳》。いい名前じゃん」

「そうかなあ」

部分的に、聞いた覚えもない喩えだった。

「そうだよ。虎狐なんて《虎の威を借る狐》かよって思うだろ? アホかったの。絶対子供に付けていい名前じゃねーよ。……でもま、この名前の一番ムカつくところは、名前の由来がそんな諺の意味さえなくって、単に母が虎好きで、父が犬科なら何でも好きだったからってとこなんだけどな」

だったらせめて、別の動物にしとけ。と、彼女は言ったが、私はなんとなく、彼女には虎も狐も似合うと思った。虎のように力があり、狐のように賢い。私にはないものを持った異次元の存在。そんな印象を私が彼女に抱くのには、そう時間はかからなかった。

だからというわけではないが、私は結局、虎狐に悩みを打ち明けた。一生の思い出を作るために、合唱コンで金賞を狙って頑張ってること。しかしなんの肩書きも、リーダーシップもない自分では、誰もついてきてくれないこと。だからこの日の練習も、まともに歌いはじめることもできず、解散となったこと……。

それは赤の他人からすれば、全く面白みのない話だったと思う。今になって冷静に考えれば、私の持っていた悩みは、学校行事の度にそこら中で投げ売りされるくらいの悩みだった。それは、決して軽んじていいものではないかもしれないが、同時に他人からすればどうでもいい悩みであることも事実。そして何より、私の話はあまり上手くない。

しかし辿々しく語られる私の悩みを、虎狐は私が想像した以上に真剣に聴いてくれた。あるときは黙ってじつと耳を傾け、あるときは合いの手を入れ、私の話を支えるように、親身になって聴いてくれた。そこには、ついさっき初めて出会っただけの相手の態度としては、むしろ不信感を抱いてしまうほどの誠実さがあった。

だからだろうか、私の話はいつの間にか本筋から逸れ、クラスメイトへの不満が、受験への不安に変わり、将来への不安へと変貌したあげく、思い出の話へとぐるりと巡る頃には、いつの間にやら空が赤く塗りがえられていた。

「結局さあ、大きな行事で頑張らなかったのが思い出を作れなかった原因だと思うんだよね。私、そういう行事ってあんまり好きじゃなかったし」

「そうかあ？」

「そうだよ。絶対そう。考えてみてよ、卒業アルバムだって、行事の場面ばかりじゃん。それってやつぱり、みんな学校生活の思い出になるのは行事だからでしょ？ だから、このチャンス逃したら私、もう後がないんだよ」

虎狐はこの点についてはあんまり納得がいったような様子ではなかったが、私のおかれた状況はしっかり理解してくれた。そして、私の話が一段落すると、不意に切り出した。

「よし。だったら練習してみる？ あたしとあんたで」

「え？ 練習？」

その言葉は、少し意外だった。

「うん。クラス全体の面倒はみれないけどさ、あんただけならなんとかなるでしょ」

「虎狐って合唱とか上手いの？」

「自信はある。ま、自信しかない、かな。経験はないし」

彼女は少し自虐的な笑みを浮かべる。

「でもま、クラス全体がやる気ないなら、あんただけでも練習しときなよ。どうせ、こうい

う行事は直前になったらみんな頑張るようになるし、その時あんたが上手けりや、自然とみんな頼るでしょ？」

その意見には、一理あると思った。毎日だから練習（とは名ばかりの集合と解散）を繰り返したって、絶対に上手くなるわけがない。むしろ「練習ってサボっていいんだ」という印象を与えるだけだ。だったら虎狐と一緒に練習して、直前にクラスの全体を先導するっていうのもありかもしれない。今よりぐっと歌が上手くなれば、クラスのみんなも驚くに違いない。

「じゃあ……お願いしちゃおうかな」

「よし。そうと決まれば、さっそく練習メニューでも作るか……そうだ、一応連絡先も教えてくれる？」

そういうと、虎狐は右手で携帯を操作するような仕草をした。どうやら、右利きらしい。

「あ、私携帯持っていないんだけど、パソコンのメールでもいい？」

「オッケー。じゃあ、何かあったら連絡する」

そう言うと、虎狐は立ち上がった。

「もう帰るの？」

「そりゃ、練習メニュー作っておきたいしね。あと、練習場所も探さないと。流石に毎回ここじゃやばいでしょ。先生にばれそうだし」

言いながら、虎狐は校舎の中へと通じる扉に手をかける。が、最後にくるりと振り返ると夕陽に照らされながら、不適な笑みを浮かべた。ふわりと長髪が舞う。

「まあ、一ヶ月くらいの短い期間だけど。その間よろしくね」

虎狐と出会ったその日から、私のトレーニングは始まった。

帰宅して一時間も経たないうちに、虎狐から練習メニューが届いたのだ。といっても、それは合唱のための身体作り用のメニューである。入念なストレッチから始まり、腹筋、背筋、体幹に表情筋のトレーニング。なぜか五キロのランニングまで入っている。

「どうしたのあんた。部活はもう引退したでしょ？」と、母から怪訝な顔をされ、

「どうした静佳、失恋でもしたのか？」と、父からあらぬ誤解を受け、

「そんなことしないで受験勉強を……あ、もしかしてあんた、脳が筋肉だから筋トレすると頭良くなるのか？」と、姉から小馬鹿にされる。

それでも私は虎狐からもらったメニューを律儀にこなしていった。正直、陸上部を引退した体にはけっこう堪える。いや、仮に陸上部にいた頃であったとしても、勧誘されるがままに入部し、辞める機会を逃していたような私には、軽いトレーニングとは言えなかっただろう。しかし、この苦勞の先に、栄光の金賞が待っている。そう思えば、挫けるわけにもいかなかった。それに、友人との秘密の特訓なんて、なんかカッコいいような、そんな子供っぽ

い動機もあった。

「ちよっと、その顔のトレーニングキモいんですけど。私のいるところでやらないですよ」
ちよっとだけなら、挫けそうになった。

そんな感じで、自宅では合唱のために身体を鍛え続けた。クラスの合唱練習は一時保留として、放課後は屋上で夕陽に照らされながら、虎狐と話す日々が続いた。

本当は、屋上でも練習ができればいいのだが、流石に歌ったりしたら屋上に侵入していることがばれてしまう。だから、私は虎狐にトレーニングの成果を報告するくらいしかできず、後は適当な話をして解散という流れを繰り返していた。

「静佳は高校とかどこ行くか考えてる？」

そんな、受験生らしい話を振られたこともあった。

「うーん。なんか私、高校受験とかって現実味がまだないんだよねえ……。どこにしよっか？」
と、私は受験生らしくない生返事をするが多かった。中学最後の思い出しには興味があっても、卒業後のことには興味が無い。そんな私を見て、虎狐は声を押し殺すように笑った。

「酷いなあ。そういう虎狐は、卒業したらどこ行くつもり？」

「んー。まあ、世界のどっかにはいるでしょ」

「私より酷いじゃん！」

他愛ない話に花を咲かせて笑いあい、不意に虎狐が立ち上がる、私たちはそれを合図に解散し、それぞれの生活へ戻り、また放課後屋上で再開する。そんな日々が続いた。

土日はと言えば、虎狐は事情があるようで、やはり私は一人、自宅でのトレーニングに励んでいた。トレーニングに慣れてくると、たいして疲れることもなくメニューをこなせるようになってくる。それを計算していたように、虎狐はトレーニングメニューを変えていく。そうしてそろそろ約一週間が過ぎようとする頃。

『練習場所が見つかった。明日の放課後からそこで練習しよう』

と、虎狐からメールが届いた。

明くる日の放課後。虎狐に連れられて行ったのは、誰も寄りつかないような場所だった。

「ぐへへ、姉ちゃん。叫んだってもう誰もこねーぜー」

「うきゃーっ！ オダイカン様お許しを〜」

なんて、意味不明な遊びをしてみましたくらい（どっちが誰のセリフかは、ご想像にお任せする）、一般人を寄せ付けないオーラが漂っている。虎狐の知り合いの家とか、どこかの公共施設とか、とりあえず真つ当な練習場所を想像していた私が、入るのを躊躇うには十分な建物だ。

私の目の前にそびえ立っていたのは、コンクリートの地肌剥き出しで、窓も嵌められてい

ない、模範的な廃ビルだった。こんなとこ使うなんて、やっぱり不良じゃん。なんて感想がうっかり漏れそうになるくらい、まともな人間が関わるべき建物ではないと思った。

「まあ、大丈夫だよ。たぶん」

なんて彼女は言ったけど、校則を破らぬために屋上での練習を避けたはずなのに（少なくとも、私にはそういう認識もあった）、世間のルールを破ってこんな場所に侵入するのだから、まったく本末転倒だ。

周囲は住宅地だが、その住宅地から廃ビルを隔離するように、朽ちかけのフェンスとか、伸び放題の植え込みがあり、民家からはそれなりの距離が確保されている。確かにちよつとくらい合唱練習に使っても、近所迷惑にはならないだろう。家からも、自転車を使えばそれほど遠くはない。

「この建物、許可を取らずに造成した場所に立てちゃったみたいだね、他にも色々な事情で裁判沙汰になってるみたい。ほんとは取り壊さなきゃいけないんだけど、証拠物件っていうの？ 裁判終了まではこのまんまらしいね。以上、おばあちゃんの知恵袋より」

そんな物騒な情報もあるからか。私は虎狐に「動きやすい私服で来るように」と命じられていた。結果、私は校外学習で山登りを命じられ、動きやすさや安全性ばかり優先したような、地味なジーパンとトレーナー姿だった。

虎狐はと言えば、もうすぐ九月も終わるというのに、ショートパンツにTシャツ姿。麦わら帽子を被り、シャツの首元には男前にサングラスをかけている。それは、夏の残りを凝縮したようなスタイルだった。これで足元がサンダルとかなら完璧だが、安全性を考えてか、虎狐はお洒落なハイカットの登山靴を履いていた。

建物の一階は不法投棄されたと思われるゴミが点々としていて、ちよつと危なっかしい雰囲気だった。なかにはまだ使えそうな電化製品もあって、ひよつとして宝の山？ と思ったけど、積あがった粗大ゴミがいつ崩れるともわからない。私たちはできるだけそれらに近づかないように、廃ビルの中を進んだ。

「ところでさあ」

不意に、私を先導していた虎狐が歩きながら振り返る。

「クラスの方は今、どんな感じ？」

「え？ あ、そのお……」

虎狐と出会ってから、私はクラスの合唱練習をやめていた。だから、状況も把握していない。仮に練習があったところで、前と同じ内容ならば自主トレの効果の方が遙か上である自信があったからだ。でも、クラス練習を途中で放棄したことに、後ろめたさがないわけではない。

「もしかして、状況とか把握してない？」

虎狐は私の考えを読みとったようで、私を非難するでもなく、親が子に語りかけるような

穏やかさで問いかけてきた。

「う、うん」

「そっか」

虎狐は再び前を向き、少し考えるように間を空けた。

「私のトレーニング頑張るのもいいけど、クラスの練習。状況くらい確認しときなよ」

虎狐は私に何かを訴えかけたいような、それでいて、既に諦めているような、私にはできない表情を浮かべた。

「一度は前に立ってたんだし、また前に立つことになるだろうからさ。クラスの様子、たまに見るだけでもいいから」

そんな虎狐を見て、私は口を開きかけた。が、言葉が出なかった。言いたいことは色々あったと思う。でも、色々ありすぎてまとまらず、言葉がうまく出てこなかった。

結局私は「うん」と、鼻を鳴らすような音で応え、それに虎狐が軽く頷くと、その話題はこれで終わりとばかりに、私たちは廃ビルの上階を目指し、ずしずし進んでいった。

粗大ゴミの間を抜けると、階段へ辿り着く。ようやく安全圏に着いたと思ったら、その階段も暗くて危なっかしい。全ての窓が常時開放されているため、比較的太陽の光が入りやすい建物ではあったが、階段には陽光を取り入れるような設計にはなっていなかった。私たちは、虎狐が持って来た懐中電灯で念の為足下を照らして進み、やつのことで最上階へ辿り着いた。

「うわー」

なんて声か、どうしようもなく漏れた。

最上階である五階まで到着すると、そこには仕切りがなく、ゴミもなく、所々に柱が立っているだけで、ただただ広い空間が確保されていた。その空間に、外から差し込む秋の色が、奥へ奥へとグラデーションを描いている。そして窓の向こうには、私が十五年暮らした街が、今まで一度も見なかった角度で一望できる。その景色に心奪われた一瞬が、「うわー」なんて言葉で片づいてしまうのはなんとも勿体ないけれど、それ以上の言葉を忘れ、私は目の前に広がる景色に心を奪われた。

「どう、気に入った？」

声を出すこともできず、私はこくこく頷いた。

合唱の練習に使えそうというだけでなく、窓から見える景色がいいからというだけでもなく、私は到着直後の印象を全て忘れ、一気にこの建物が好きになった。

そして一仕切り自分のなかで様々な言葉や思いが渦巻いた後、私は不意に幼かった頃の気持ち思い出した。小さかった頃、私がここを知っていたらどんな風に遊んでいただろう…。

「ねえ、これからここ、私たちの秘密基地にしない？」

気づけば、なんとも子供っぽい言葉が出てしまったのも、そのせいだろう。言ってから、何を言ってるんだ私はっ！ と、焦り、顔がカッと熱くなる。

「いいねえ。秘密基地か」

虎狐は少し苦笑いしているようにも見えたが、私の意見に賛同してくれた。

そうだ。やっぱりここを、私たちの秘密基地にしよう。

合唱コンクールが終わるまで、私たちはこの秘密基地で練習するんだ。それで栄光の金賞を手に入れる。それから、合唱コンクールの後も、虎狐と一緒に遊んでたくさん思い出を作ろう。トモちゃんとチサトとナツも呼ぼう。金賞が取れたのは、虎狐の御陰なんだよって紹介しよう。馬鹿の神崎を呼んだっていい。毎日この建物で日が沈むまで遊んで、卒業するまで思い出を作るんだ。そして卒業したら……。

卒業したら、私たちは、どうなるんだろう？

「ほら、ぼけーとしてないで、合唱の練習始めるよ」

虎狐と呼ばれ、私はこの建物にきた目的を思い出す。焼け付くような夕陽の中で練習を始めようとするうちに、いずれ確実に訪れる私の未来は、あっさり消えていった。

4

虎狐と出会ったあの日以来、クラスの合唱に対する雰囲気も、少しずつ変わってきているように感じていた。

まず最初に感じたのは、音楽の授業。合唱練習に熱心な生徒が増えていたのだ。まだまだ一致団結という表現を使うには程遠いが、日を追うごとに、その雰囲気は濃くなっていった。素人の私が見ても、一部の生徒の取り組み方がまるで違っていたのだから、その認識は間違っていないのだろう。特にパートリーダーや合唱コンの実行委員など、前に立って先導する立場の人達が、自らの役割に目覚めてきたのは、当時の私の眼にも明らかだった。

虎狐とのトレーニング開始からそろそろ十日。合唱コンクールまで、ほぼ半分が経過した。私が練習を無理強いすることをやめてから、危機感が彼らを動かしたのだろう。

順調順調。

と、間拔けな私は、クラスメイトを自分の手の上で踊らせているような錯覚に陥りつつ、周囲の成長に満足していた。

「よう！」

そんなある日、音楽の授業が終わわり、クラスメイトの成長に満足していた私の虚を突いて、背後から気さくに話しかけてくる男子生徒が一人。そんな奴には一人しか心当たりがない。

「何、神崎。ゲームは諦めた？ だったら返して」

私は振り向かず、授業で使った荷物をまとめながら応える。

「違うって、あれはもう八章まで進んだ……っていうか、お前こそ諦めた？」

「何が？」

「何がって合唱だよ。朝とか放課後とか、お前、練習やらなくなったじゃん」

「ああ、練習ね」

残念ながら、この馬鹿の口調からは、まだまだ危機感が微塵も感じられなかった。

「いやー正直よかったよ。お前が似合わないことやり始めたときは焦った、焦った」

「失礼ね。似合わないなんて」

そうは言ってみたものの、私だって似合わないことをしていたと思う。まあ、そろそろまたその似合わないことをすべき時期が近いことも、自覚していたが。

「いやいや、似合っていない。全然似合っていなかったよお前。だってよ、お前は俺と同じ側の人間だろ？ なんていうの、こういう学校行事にはつきあわないで、ゲームとかやりたいことやって、遊んでるタイプ」

「まあ……確かにそんな感じだったけど」

神崎は、私が必死に庇っても馬鹿であることを覆い隠すことが出来ない程度には馬鹿な生徒だ。定期テストでも、常にクラス最下位の覇権を巡り、壮絶な戦いを繰り広げている。一緒に遊んでいても、「ああ、こいつ本当に可哀想な……」と思わせるくらいに、頭が悪い。

だけど、神崎の言う私に対する印象は、恐らくそれほど間違っていないのだったと、今でも思う。そういう人間関係とか、人の立ち位置に対するセンスだけは妙に鋭い奴なのだ。一言で言うなら、察しがいい。こいつはそれだけで世渡りをしていて、ここぞと言う時に他人に優しく接するから、クラスでもそれなりに人気があった。頭の悪さだって一種の個性として認められていたくらいだ。そんなところは、当時の自分にはちよつと羨ましかった。

「まあ、いいじゃない私のことなんて。今年はなんとなく、頑張ってみたくなったの」

「だから、そういうのが似合わないって思うんだけどなあ」

そんなことをぼやきながらも、神崎も教科書やら歌集やらをまとめ終わり、私たちは他のクラスメイトに少し遅れて、音楽室を後にした。

「俺はさ、無理しないで後ろでじっとしてるってのも悪くないと思うのよ」

神崎はまだ話し足りないようで、私と並んで薄暗いリノリウムの廊下を歩いた。

「なんていうのかな。世の中には前に立つ人もいれば、後ろに立つ人もいる。というか、後ろ立つ人がいるから、前に立つ人っていう考え方ができるわけで……」

「結局あんた、何が言いたいわけ？」

「それはほら、よく言うだろ？ 適材適所ってやつ？ なんか、リーダーになる人ばかり偉いようにいわれるけどさ、それでこそ《良い人》っていう風に学校でもテレビでも大人は言うけどさ、静佳が無理してらしくないことしなくてもいいだろうって話」

「それは……そうかもしれないわね」

珍しく小難しそうな話を語りだすものだから何事かと思ったが、正直どうでもいい話だった。自分でも、らしくないことだってことはよくわかっている。私は話を聞いて損したとばかりに、小さく溜息を吐いた。

でも、なんか私の行動を否定しているあたりは、ちよつとだけむつときた。

「それをいうならさ、あんたこそらしくないよ。そんな話をするなんて」

「はあ？ そんなことないだろ」

「そんなことない？ どうして」

「どうしてって、だって俺達、受験生だろ」

ドキリとした。

受験生。その言葉を意識していなかったわけではない、むしろ、毎日のように意識の片隅に居座っていた。でも、あの馬鹿な神崎でさえ、その言葉を口にするようになってしまった。その事実には私は、驚きを隠しきれなかったと思う。

でもそういうえば、受験生だからこそ、今私は頑張ってるんだった。

中学最後の思い出づくりとして、こんな努力をしてるんだった。

思いがけず、そんなことを意識させられる。

しかし私の意識はそこで止まった。

いや、それどころか、きっと最近の私を見た神崎は、私のことを、「内申点を上げるために合唱を頑張るセコイ女」と勘違いしていたのだと思い、あげく、何とも神崎らしい浅はかな考えだと、私は感じてしまった。

「まあ、俺達のクラスには合唱部も吹奏楽部も多いからさ、お前が頑張らなくてもよーだよ、よー」

危機感の足りないアホ面でそんなことを言うと、言いたいことを言って満足したのか、それとも早く教室で遊びたくなったのか、神崎はガキっぽくにやりと笑い、光の射す角の向こうへ駆けた。

薄暗い廊下に一人残された私は、これだから馬鹿は困ると、頭を振る。

しかし、今になって振り返ってみれば、馬鹿だったのは私の方かもしれない。

あの頃の私はいつだって浅はかで、危機感も足りていなかった。

「静佳、毎回そこで半音低い。癖になってるよ」

「この歌詞は、発音に注意して。歌詞の内容をしっかりと考えて歌って」

「音を切るのが早い！ちゃんと楽譜見て歌って！」

「楽譜ばっかり見ない、姿勢も意識して」

「表現力が足りてない。もつと表情豊かに、声に感情をこめて」

虎狐の厳しい指摘が次々とぶ。教室でこんなことをしようものなら鬻蹙を買って、下手す

ればクラスが空中分解しかねない勢いだ。

廃ビルでの特訓を始めて、そろそろ一週間が経過する。

流石にトレーニングに慣れてきた私は、放課後この廃ビルへ移動してから、基礎体力のトレーニングを行っても、合唱練習に取り組む時間を確保できるようになっていた。

虎狐のトレーニングは歌の方もけっこうハードなものだった。酷いときはわずか一小節の練習を延々と繰り返し、その日の練習が終わってしまう。

しかし、それに負けじと私も必死についていったし、虎狐の指導には、そうさせるだけの適確さがあつたのだと思う。少なくとも、僅か一週間の練習で、以前とは比べものにならないほどに、私の歌が上達していたのは確かだった。

でも。

「だめ。ちょ、ちょっと休憩させて……」
正直、一対一でやる内容としてはかなりきつい。歌が始まる前の時点で、既に筋トレと発声練習でこつてり絞られているのだ。時間はあつても、体力が保たない。正直陸上部時代の最盛期でもしんどいだろう。その上びしばしとツツコミを受けながら一曲、二曲と歌いあげれば、もうグロッキー。時間もそろそろ夕食になってしまう。

「まあ、今日もこんなもんなあ」

虎狐はいえば、体力トレーニングは私に付き合ってくれてるし、私の歌に合わせて持参した鍵盤ハーモニカを演奏したりとけっこう大変だと思うのだけど、全く疲れを見せない。「凄いな虎狐。なんでこんなことできるの？」

私を指導するだけでなく、気づけばここ数日で、彼女は鍵盤ハーモニカで課題曲も自由曲もちょつとくらいなら弾けるようになっていた。

「んー？」

床に座った彼女は吹き口を唾えたまま首を傾げて逡巡し、そして、吹き口をぽつと離す。

「……女に過去を訊ねるなんて、野暮な人だね」

虎狐は冗談っぽく唇に指をあてた。

「まあ、昔ちょつとならピアノとかやってたことがあつたからね。その時の名残？ うん。

よく残ってたな」

と、視線を天井に移し、自分でも不思議そうな表情を浮かべる。

「へえ、ピアノ習ってたんだ」

「うーん。まあ、昔だよ。昔。忘れちゃってたり、離れたかったりするくらい大昔」

虎狐は鍵盤ハーモニカを置き、一回大きく身体を伸ばすと、冷たいアスファルトの床に寝そべる。私も彼女にならって寝転ぼうかと思つたが、トレーニングの時に使ったマットは既に片付けられていたし、アスファルトはだいぶ汚れていたので、遠慮した。

「そういえば、どうやってこんなところ探したの？」

「ああ、それはおばあちゃんの知恵袋だよ」

「おばあちゃん？」

「そういえば、虎狐の家族については、聞いたことがなかった。」

「近くに住んでるの？」

「まあ、近くに住んでるけど、親戚のおばあちゃんじゃないよ。ちょっと親しくしてるおばあちゃん。ここの近くに、雑貨屋の『モリナガ』って小さな店があるんだけど、知らない？」

「知らない」

この場所は私の家からそれほど遠くもないが、近くもない。自転車で二十分くらいかかる。だから、この近くの地理には、たいして詳しくもなかった。

「そっか。あたし、そこでときどきバイトみたいなことしてるんだ」

「バイト……って、私たち中学生でしょ。虎狐のこと雇ってくれたの？」

「まあ、背も高いし大学生って言うても大概騙せると思うけどねー。流石に本当に仕事としてやったら、ばれたときに相手に迷惑かかっちゃうよ」

「じゃあどうしてるのよ」

「親しくなって、お店まかせてもいいかな〜って関係になる。後は、暇なときに店番やってあげてるの。ほんとはもう働く必要なんてないんだけど、ぼけ防止のためにお店畳んでないっておばあちゃんのお店だから、けっこう融通きくんだよ」

「へー」

そんな世界もあるものか。

「まあ、ちょっとしたお手伝いレベルだから、ほとんどお金にはならないけどね。お駄賃は貰ってる。知らなかった？ こういう稼ぎ方」

私は首を横に振った。

「中学生でもこんな身近にお小遣いを稼げる場所があったなんて、初めて知ったよ」

不意に世界が広がったような気がした。私の手の届くくらい身近に、全く知らなかった世界があつて、そして、そんな身近なところで、お金が動いている。当たり前のことだけど、虎狐の口から語られたそれは、私にとっては日常の向こう側であり、同時にとてもリアルなものだった。

お金の動き。それは当時の私にとってまさしく大人の世界だった。

私は虎狐の話に驚きと魅力を感じると共に、何か得体の知れない不安を一瞬感じたように思った。が、それは本当に一瞬のことで、私の思考は自分自身にさえそれを気付かせないように、注意深くブレーキをかけ、平静を装った。

「灯台下暗しって、このことよね」

「なーに静佳。お金に興味あるの？」

虎狐は寝転んだまま向きを変えると、私の方へと少し、にじり寄ってきた。

「まあ、人並みには興味あるけど。お金」

興味がない人を見つける方が難しいだろうけど。

「ほかにもね、有償のボランティアなんかで稼ぐ方法もあるよ。まあ、どっちも気持ち程度の小遣いだし、下手するとほとんど交通費で消えちゃうから、貯めるのきついんだよねー」

「なんか大変そうね」

「とりあえず、お店の手伝いやるなら、先生にばれないようにね」

「べつにやらないわよ」

「ボランティアは、お小遣い稼ぎが目的だって思われると嫌がられるから、注意してね」

「それもしないわよ」

「なんだ、あたしはてつきり静佳もお金に困ってるのかと思った」

と、力になれず本当に残念といった具合で、彼女は言う。

「まあ、全く困ってないわけでもないけどね。ゲームはやる時間考えるとたくさんあってもしょうがないし、陸上の関係とかは親がお金出してくれてたから」

「親かあ……」

虎狐は一瞬何かを考えたようだったが、私はその表情を読みとる余裕も与えず、

「静佳の親、見てみたい」と出し抜けに言いだした。

お金の話と思ったら、今度は親ですか。

ころころ変わる虎狐の話に翻弄されつつ、私は彼女の発言を奇異に感じた。少なくとも、同級生で「あなたの親に会いたい」なんて言い出す人に会ったのは初めてだ。

「よし、今度遊びに行く。静佳の家」

「え、ちよつと待ってよ、そんな勝手に……」

恥ずかしい。

別に変な親じゃあないけれど。そう思いたいけど。なんとなく同級生に親を紹介するっていうことに、当時の私に抵抗があったことは紛れもない事実だった。

「いいじゃん。あたし、まだあなたのことあんまり知らないし、いい機会だからさ」

慌てふためきながらも、そう言われたことだけは、今でもよく覚えている。

それは、お互い様だったから。

この頃の私は、虎狐のことを本当に何も知らなかったのだ。

彼女のことも、彼女の家族のことも。

人間万事塞翁が馬なんて言うけれど、実際、何が自分にとってどんな巡り合わせをもたらすかなんて、誰にもわかるわけがない。だからこそ、私たちは何度でも失敗するし、何度でも前向きに考えられる。そんな風に物事をとらえるようになったのは、いつ頃からだっただろう？ 少なくとも、まだ中学生だったあの頃、私にとって友達というものは、どんなとき

だつて共に泣き、共に笑い、共に立っていられるから、友達なんだと思つていた。

なんとも単純で、お気楽で、脆くて、辛くて、そして真っ直ぐでいられた、あの頃。

夕暮れの帰り道。廃墟を出て虎狐と別れ、少し自転車走らせた場所。そこで、思いがけずトモちゃんと出会つた私には、彼女の想いが全く理解できていなかった。それだけは確かだ。

「あ、トモちゃん」

私は声をかけた。それが、当たり前のことだつたから。

トモちゃんと一番仲がいいのはチサトだ。私はトモちゃんの「親友」ではない。そんなことはわかつている。でも、友達だとは思ふ。だったら、声をかけるのは、当然であり、そもそも、それを当然とか意識することさえ、当時の私にとっては「？」なことだつた。

私が声をかけると、トモちゃんはかすかに身体をふるわせたように思えた。そして、おもむろに私へと振り返るその仕草、その表情。そこには何か、妙な感じがあつた。

なに？

なんかやうなの？

私になにかやうでもあるの？

同じような言葉が、徐々に明確に、力強く、彼女から発せられたように思う。が、彼女の口は開かなかつた。私が自転車から降り、彼女へと近づき、その雰囲気妙な気配を感じて首を傾げた頃、彼女はようやく、渋々といった具合に口を開く。

「……静佳。練習しなくなったね」

練習？ さっきまでしてたけど？

首を傾げたままだった私も、流石にすぐに理解した。学校での練習のことだ。

しかし、その後が続かなかつた。いまさらなんで、トモちゃんがそんなことを言うのか？私があれば練習しようと声をかけても歌ってくれなかつたトモちゃんが、なんで？

右に傾げた首を左に傾げるように、私が疑問の間で揺れ動き、口をきけずにも、トモちゃんはそれ以上何も言おうとはせず、ただ、視線を地面に落とし、立ち尽くしていた。

なんだろう？

よくない。

これは、よくない気がする。

「あ、あのっ」

「じゃあ」

私は気持ち悪い焦燥感に駆られ、やっとの想いで声を絞り出すが、トモちゃんは私に背を向け歩き出す。私を拒絶するように、逃げるように。

きつとこのとき、すぐにでも呼び止めていれば、いろいろなことが違つていたのだろう。

その違いは、私が卒業する頃にはほとんどなくなつていたのかもしれないけれど、しかし、

少なくともこのときの私にとっては、重大な分岐点だった。「歴史にもしもはない」なんて言うけれど、（誰が言ったんだ？）このとき私がトモちゃんを呼び止めていたら、どうなっていたのだろうか？ そう私は何度も振り返り、その度に、あの頃から続く道へと戻っていたのだ。

立ち尽くす私を置き去りにして、トモちゃんは夕闇に溶け、私はふと遠い空を眺めた。ついさっきまで射るような光を放っていた太陽は、山の端に僅かな朱を残し、既に見えなくなっていた。

何事にも終わりはある。

楽しい遊びにも、辛かった練習にも。

ある時は、太陽が沈むように必然として。またあるときは、にわか雨のごとく、唐突に。

このとき訪れた終わりというものは、私にとっては、にわか雨のように突然のものと感じられたけれど、今にして思えば、それは周到に用意された必然で、どちらかと言うなら、太陽の巡りのようなものだった。

とにかく、終わりというものは、一瞬だ。

きつと今まで、そんなことに気付くことさえもなく、私はいくつもの終わりを見逃してきたのだろう。こんなにもあっさりと物事が片づいてしまうというのなら、気付かないのも当然だ。

放課後の屋上で、このときの終わりは訪れた。

明日から本格的にクラス練習を始めよう。そのために、楽譜の最終チェックを行おう。そういう船出直前のことで、呑気な私には、全く終わりの気配なんか感じられなかった。

「静佳……なにしてんのよ」

「あ！ チサト！」

だから私は屋上に突然現れた、チサトの表情にも、声色の意味にも気付くことなんかなくて、

「そういえば、チサトに紹介してなかったよね。ごめんごめん」

てっきり虎狐のことを警戒しているのかと思ってしまった、

「何？ その人」

「虎狐、番匠虎狐。ちょっと前に知り合ってたね……」

『誰？』じゃなくて『何？』と言われたことにも気付かず、

「そんなこと訊いてんじゃないわよ、なんで、静佳が屋上で他クラスの人と会ってるのよ」

「……え？」

そもそも、何でチサトが本来立ち入り禁止の屋上に、しかも放課後に現れたのかにも頭が回らなくて、

「だいたい、その広げてるものは何？」

「あ、これね」

ようやく不穏な空気に気付いてはみたけれど、でも、その理由もいまいちピンとこなくて、「みて、これ！　すごいでしょ！」

虎狐と一緒にチェックをしていた、課題曲の楽譜を掲げてしまい、

「……つまり静佳。あんた自分のクラスを売ったわけ？」

「……………え？」

ようやく、自分が今どういう立場になっていたのかに気が付いた。

そして、全てがつながった。証拠もなにもないけれど、きっと、馬鹿の神崎の発言も、トモちゃんの態度も、ここへとつながっているのだと、一瞬で理解できた。

いや、既に理解していて、私はそれに気付かないようにしていただけだろうか？

「何あんた？　練習に参加しなかった私達に恨みでもあるわけ？」

「そ、そんなこと……」

「もういいよ。あんたは来なくて」

「…………？」

何を言われているのか、理解できなかった。あるいは、理解しなくなかった。

「だから静佳。あんたは練習来なくていいって言ってるの」

来なくていい？　練習に？　いったい何の？

「あんたとは、一緒に歌いたくない」

そしていつの間にか私を静寂が包み込み、チサトは屋上からいなくなっていた。

私の思考が彼女に追いつくことは、最後までできなかった。

それから。

私の指導を聞いてくれる人は、もはや誰もいなかった。

クラスの一員として歌うことは許されたけれど、周囲は腫れ物に触るように私に接し、微妙な疎外感のなかで、私はクラス練習に参加することとなった。

合唱は心をあわせるものである。だから、金賞を取るにはクラスが一つにならなければならない。

そんな、先生の言葉は嘘だったらしい。合唱コンクールで、私たちのクラスは見事な合唱を披露し、金賞の栄冠を授かった。

でもそのことに、私が喜びを感じる事はなかった。

それでも当然、私の人生は続く。

ポエムに続きがあるように、私の人生も続いていく。陳腐な言葉かもしれないけれど、日はまた昇るということらしい。そして、やまない雨はない。

幸か不幸か、クラスメイトの私に対する誤解は、いつの間にか解けていた。それ自体はけっして悪いことではないけれど、しかし、誤解が解けたということが、問題の解決となるわけではない。それどころか、誤解であったという事実が、じわりじわりと浸透していくにつれて、私とクラスメイトとのよそよそしさは、今まで以上に鮮明になっていった。憎しみとか、恨みとか、そんな感情はなく、それでいてどことなく気まずい空気に包み込まれて、私は一人、立ち尽くす日々が続いた。

いやだなあ。このまま終わっちゃうの。

でも手遅れだ。そう、思った。

合唱コンクールが終わり、三日が経ち、一週間が経とうとしても、私はクラスの誰ともまともに口をきくこともなく、日々を過ごしていた。

お互いに勇気がなかったと言えば、たぶんそれまでのことなんだろう。でも、この状況から抜け出せるようなきっかけを、あの頃の私は自分の力で見つけられなかった。残された中学生活は、溶けすぎた水で薄められたジュースのようで、それを我慢して呑み込むような日々を、私は続けた。泣くことも、怒ることもなく、ただ「ああ、終わってしまったんだな」と、妙に冷めて現実を見つめる。そして、そんな私自身に気が付き、身体の芯がひやりとし、深く考えないように努める。その繰り返しだった。

虎狐とはその間、会っていない。

あの日、虎狐と私がクラスでの練習方法について話会っていたところをチサトに目撃されたから、虎狐とは一度も会っていなかった。「ごめん」とだけ言い残し、虎狐は私の前から去ってしまった。

最初はその日限りだと思っていた。けれどあれきり、放課後の屋上には澄み渡った秋の空が広がるばかりで、そこに彼女の姿を認めることはなかった。彼女のクラスに行ってみると、あの日以来、学校を休んでいるという。メールも送ってみたが、返信はなかった。

結局クラスに打ち解けることもできず、かといって不登校にもなれなかった私は、学校が終わったら真っ直ぐ帰宅し、勉強もせず、ゲームに明け暮れる日々を続けることになった。

でも、そんな日々であっても、人生は少しずつ、しかし確実に進んでいく。そして、変化のきっかけは、どこにでも潜んでいる。

この日、学校が午前授業でなかったら、私の人生もまた、大きく変わっていたのだろうか。

その日は暑く、時間だけが有り余っていた。

もう十月も半分終わろうというのに、昼のアスファルトの上に陽炎がたゆたうような日だ

った。温暖化。異常気象。ヒートアイランド現象。そんな言葉が意味もなく思い出される。憂鬱な学校は三時間目で終わり、お陰で家で涼むことができたのはよかったけれど、それが私に何らかの幸福感を与えてくれるかといえば、そんなこともない。私は冷房の利いた自室に籠もり、いつものように帰宅後の時間をゲームで潰すだけだった。

ピコピコピコ。カチャカチャカチャ。

ついでにベッドにごろーん。

最近のゲームは、カチャカチャ遊ぶことはできても、あまりピコピコ音が鳴らないと思うが、この頃遊んでいたのはファミコンの復刻版のゲームだったので、古いゲームによくある電子音を、私はけっこう響かせていたと思う。

「ちよっとさあ、あんた」

だからだろうか、私は自室の同居人である姉の不興を買った。部屋を仕切るアコーデイオンカーテンの影から、姉はぬつと姿を現した。声ではあからさまに不快感を表明しつつ、澄ました仮面でわざわざ表情を繕う姉を、なんとはなしに気持ち悪いと思った。

「やめてくんないかな。集中力とぎれるし」

姉は高校三年生。このとき大学受験を控えていた。第一志望はイトコの法学部。だからこの頃の姉は、午後の授業がない日は、予備校か家の机に向かって過ごすことが多かった。姉妹であることが疑わしいくらいに真面目で、なんでもきっちり、きちきちこなす、典型的なA型タイプ。眼鏡こそかけていないけど、二つ結びのおさげ髪は、彼女の生真面目な性格によくマッチしている。うるさい母の影響で、渋々夏期講習だけ塾に通ってお茶を濁した私とはえらい違いだ。きっと、将来はもっと偉くなるのだろう。そう思っていた。

「これで受験落ちたりしたら、あんた責任とれるわけ？」

仮面を張り付けたまま、姉は声で私を威圧する。

こういう風に言われることに、私は弱かった。自分が悪いのはよくわかっている。だからこういうときの私は、すぐごと部屋を変え、姉の怒りの及ばぬところへ逃げていた。いや、そもそもこの時期になると、相部屋である姉に配慮して、極力自室での行動を避けるのが、私の常だった。

でも、学校でいろいろあった私は、もういろいろなことが、どうでもよくなっていた。いや、もつとはっきり言ってしまえば、姉の行っている《受験勉強》なる行為が、なんとも卑しいものに感じられていた。

努力なんて、どうせ報われない。

運良く報われた奴らが、報われなかった人たちを嘲笑う。どうせそれが《大人》の社会だ。そんな社会に迎合する奴等は、人間を不幸せにする元凶だ。

だから、私はゲームの画面から一瞬だけ姉へ顔を向け、表情だけで露骨な不快感を表明すると、すぐさまゲームへ戻った。

ピコピコピコ。カチャカチャカチャ。

ピリツとした沈黙が、肌で感じられた。

そして姉はおもむろに、私の方へと近づいた。なおも私が無視していると、私の遊んでいたゲーム機を鷲掴みにし、奪い取り、投げようとして躊躇い、

ブツ。

電源を落とした。

「ちよっ！ 何すんの」

「何すんのはこっちの台詞よ！」

全く、姉の意見が正論だと思う。

「よくもまあ、人が集中して勉強しようってところで音量全開でゲームできるわね。だいたい、あんたも受験生でしょ」

「何よ、姉ちゃんこそ人が楽しくゲームしてる部屋で辛気くさい空気作らないでくんない？ そんなことだから彼氏の一人もできないのよ」

「彼氏がなんだっていうの。んなもんいらぬ。わかる？ 将来が大事な。今をただら生きてるあんたにはわかんないと思うけどね、将来のために私は努力してるの」

「将来将来って、そんなの全然わかんない。わかるわけがないよ。今のことだってどうせよくわかんないんだから」

だからどうした？ と、言わんばかりに姉は肩を落として溜息をつく。

「で？ それがあんたが勉強しない理由なわけ？ あんた、無知を棚に上げてそんなこと言ってる、恥ずかしくないわけ」

そういうと、姉の放っていた威圧感は急に抜け落ちた。そしてようやく仮面をとった姉の顔は、怒りでなく、憎しみでもなかった。もつと私が、その頃の私が嫌な、私の心をぐちゃぐちゃかき乱す、その表情。

「わざわざ言うことじゃないけどね、あたしもあんたも、あと十年もしないで社会人になるのよ。そしたらこんな生活続けられない。あたしだって、第一志望に受かったら、来年にはもう、この家にいないかもしれない。何があるかなんて、全然わかるわけがない。それが当たり前なの……」

やめて欲しい。

そんなことを優しく説こうとする姉なんて、本当にやめて欲しい。怒りを真っ直ぐぶつけてくれた方が何倍もましだ。

「……いくら将来のことが不透明でもね、今頑張るの。今頑張っておけば、少しでも将来の可能性は広くなる。子供は無限の可能性を持つてるなんて無責任な言葉があるけどね、つまり頑張らなければ日々その可能性は……」

「……やめてよ」

気持ち悪い。

反吐がでそう。

意図せず、一オクターブ声が低くなった。

「そういうの、やめてよ」

私は姉の顔を見ずに、呟く。

「あのね、これは大切な話なの。確かに今は無意味に見えるかもしれないけど……」
違う。

決定的に、ずれている。

私が姉に求めるものと、私に姉が求めるものが、決定的にずれている。

「うるさいっ！」

「ちよつと、静佳……」

「お姉ちゃんなんか、大嫌いっ！」

私はそう叫ぶと、何も考えず走りだしていた。本当に、これ以上なく何も考えていなかったのだろう。気付けば焼けたアスファルトの上を、私は駆けていた。靴を履いていたことが不思議なくらいだった。

当時の自分でも、小学校低学年並かと思える発言。そして行動。

でも事実、大嫌いだった。

普段口が悪いくせに、怒りをストレートにぶつけてこない姉が。いつの間にか妹の私を、怒りをぶつける対象として見なくなってしまった姉が、たまらなく嫌いだった。

そして、姉の顔が。私はその頃学校で、毎日見せられてきたものとそっくりな姉の顔が、私の心をどうしようもなく波立たせた。

それが哀れみの表情であることに気付いたのは、そう遠くない日のことだった。

目的はたいてい、特になし。

だから、いつも通りと言えばそれまでのことなんだけど、走り続けて息があがり、速度を落とすし始めるにつれて、これはないと思った。

財布なし。学生服のまま。そんな状態で家出してしまった。いや、別にこのまま夜になる前に家に帰れば、誰からも家出とは思われないのだろうけど、私に帰る意思はなかったのだから、私の中では、既にこれは家出だった。

まだ昼を少し過ぎた程度。

とりあえず、近所をぶらぶら歩いてみたけれど、行くべき場所はどこにもない。当然だけど、遊ぶ友達もいない。真夏に較べれば穏やかとはいえず、徐々に暑さも気になってくる。ついでに最悪なのは、先生の見回り。ご苦労なことに、午前授業を利用して遊び歩こうとしている生徒を、手の空いていた先生が定期的に見回りし、注意しているそう。

となると、誰にも見つからない場所で、じつくり時間を潰せて、せめて日差しを避けられて、しかもお金がかからない場所が必要となる。

まあつまり、行きたい場所はなくとも、私の行くべき場所は、家を出た時点で実はほとんど決まっていたようなもので、そこへと至る道中、何か手頃な暇つぶしが見つかればいいなという程度の考えで、私はぶらついていたのだった。

到着までは、一時間もかからなかったと思う。

私の目の前には、最近めつきり足の遠のいていた、あの廃墟があった。

ここになれば、何かが変わる。

たぶん、それを私は知っていた。

足が遠のいていたのは、そのせいだ。

だから、最上階にあがる直前で、彼女の声を聴いたとき、私の中では驚きよりも納得の方が勝っていた。

「おー、よしよし。いいこだなあ」

足音をたてず、最上階まで上りきり、開けた空間に視線を走らせる。そこには窓枠に腕を乗せた、長身の少女が立っていた。窓から吹き込む穏やかな風に長髪をなびかせ、右手の甲には、クワガタを乗せている。

「おまえ、よくこんな時期まで生き残ったなあ。ま、冬を越すやつもいるっていうけど、秋はお前らどうやって過ごしてるの？」

魚に話しかける人を悲しいという意見を聞いたことがあるけれど、クワガタに話しかける人ってどうなんだろう？

そんなことをちらと考えながらも、私は階段を上りきったところで立ち尽くし、虎狐をただ眺めていた。

なんとも妙な気分だった。冗談のつもりで言ったことが、実は本当で、「私はそのことを知っていたんじゃないかったっけ？」と、後になって自分を疑いたくなるような。そんな感じ。

後ろ姿の虎狐は、合唱練習のときに何度も着てきたあの夏の残りを固めたような服装だった。クワガタの存在もそれを引き立て、彼女のいる窓辺だけ、真夏の輝きを放っていた。

彼女はクワガタの背をうりうりと撫ぜながら、なおも話し続ける。

「んー？ あたしか？ あたしの生活が気になる？ あたしは最近ちよつと家に籠もつてたよ。冬眠じゃないけどさ。今後の身の振り方とか、思うところがあつたから。でもさー、家に籠もつてるのって、あたし嫌いだからさー。慣れないことするんじゃないね……いや、慣れてると思うっても、失敗するなんて、よくあることか」

不意に、輝きを感じていた彼女の表情に、影が差していることに気付いた。そんな雰囲気が、遠目にも感じられる。

「慣れてると思ったんだけどなあ。でもやっぱり、あたしもまだまだガキだし、知らないこ

とも、できないこともたくさんあるんだよな。そう思い知った。いや、良い経験だったと思うよ。でも、良い経験が積めたからって、それが良い思い出になるとは限らないんだよなあ」
彼女は溜息を吐いたような気がしたが、遠くからではその音は聞こえず、ただ、彼女の指先が、手の甲に乗せたクワガタをゆっくり撫でているのだけが、妙にくつきり見えた。

「人の気持ちが変わったらしいなって思うよ、あたしも。まあ、時々だけど。でも、気持ちが変わったらどうなるかなんてのも、またよくわからない話だし、どうせわかりっこないんだよな。気持ちなんて。だから、あたしはあたしにできることを、まずはやるしかないんだよな。でも……」

そこで虎狐は意図的に言葉を切った。

私のために間を作ったのだ。そう思った。

たぶん、私がそう感じ取ったことは、虎狐にも伝わったと思う。

「やるだけのことをやったつもりで、誰かを傷つけてしまったら、あたしはいたいどうすれば良い？ 静佳」

他の人がやれば演技っぽい間と動作。それを彼女らしい所作に変え、虎狐は振り返り、私に尋ねる。私もそうなることを待っていたのように、やはり計ったような間を置いて、何もない空間の中を、虎狐の方へゆっくり歩み寄る。

「いつから気付いてた？」

「んー。この建物入るとこ。上から見えてた」

まあ、超能力者じゃあるまいし、そんなことだろうと思った。

「前から思ってたけどさ、なんか虎狐って演技っぽいことするよね」

「ああ、あたし演技とか好きだしね。映画とか、体操とか、殺陣とかも」

「私、虎狐のそういうとこ、嫌いじゃないよ」

正直な意見が、口から漏れていた。

「そりゃどうも」

虎狐はごく自然な笑顔を見せた。初めてあった日から何度も見てきた、微笑みより力強い、他人に力を与える笑顔だ。

私は虎狐の隣に立つと、何気なくいっしょにクワガタを撫ぜた。幼い頃、名も知らぬ近所の少年少女と捕りに行ったそれは、中学生にもなると、どことなくグロテスクなようにも思えたが、撫ぜてみると、そんな気持ちは嘘のように消えていた。

「なんでいなくなったのよ」

こんな風に、クラスメイトにも話せたらいいのに。言いながらそう思った。

「はは。私だって、落ち込むこととか怖いこととかあるんだよ」

虎狐は言った。珍しく、力ない笑いに感じられた。

「私も弱い。かなり弱い。だから、もっと強くならなきゃいけない。なりたいと思う。前か

らね、そう思ってた」

そう言われて、しかし私は、虎狐のことを本当に強いと思った。たぶん、私がクラスメイトに言えないことを、虎狐には言えたのは、私が虎狐の強さを信頼出来たからだ。

「あんたには負けるよ」

虎狐は、不意にそう言った。

「あんたは強いね」

「？ なんのこと」

「あの後も、地味にクラスの合唱に参加したんでしょ？」

「……地味で悪かったわね」

「クラスでなんて言われても、反論もできずに流れに従った」

「主体性なんて、どうせいつもゼロよ」

「きつとあたしがいなくなっても、あたしの渡したトレーニングを律儀に続けてた」

「自分じゃ他のトレーニング考えられなかったんだから、仕方がないでしょ」

「その挙げ句、金賞とつても、その努力や功績を讃えられることはなかった」

「どうせ自己主張が下手よ、私は」

「そんなこと、あたしにはできないな。たぶん、一生できるようにならない」

「しよがないじゃない。私、不器用なんだから」

「ははは、まあ、怒らないですよ。これでもあたし、けっこう本気で褒めてるんだよ？」

首を傾げ、私を見つめる虎狐。その笑みに、寂しさが見え隠れしているように思えた。

ああ、不器用なのか。彼女も。きつと、私以上に。

彼女も、やっぱり私と大して変わらない、中学生の一人なのだ。

「今日までよく泣かなかったね」

「え？」

「いや、見てたわけじゃないけどさ。なんとなく。誰からも褒められることもなく、打ち解けることもなく、ただ、日々を耐え抜いてきた。そんな顔してる」

やっぱり虎狐は超能力者かもしれない。

「だからさ、もうそろそろ我慢するのはやめて気楽になろう。きつとそろそろ、いい頃合いだ」

そういうと虎狐は、手の甲に乗せていたクワガタを窓枠にそっと降ろした。

「ほら、私が褒めてやるよ」

言うがはやいか、彼女は私を抱きしめた。慣れている。そう感じさせるくらい素早く、そして自然な流れで、私は彼女に包容されていた。

どく、どく、どく。

鼓動を感じる。

ふと気付けば、頬が濡れていた。それが私の汗なのか、涙なのか、虎狐の涙なのか、そんなことはわからないけど、気にする必要はなかった。

「金賞おめでとう。よく頑張った」

ようやく気付いた。

あの日々を共有できた相手を失わないことができれば、私はそれで十分だった。

6

「いつだって、あたし達は自分で自分の限界を作っているんだ」

虎狐らしい意見だと思う。

でもきつと、誰もが一度は感じたことのある意見だ。

「だから、本当は自分が思っている以上に、あたし達はたくさんの方ができる。なんでもできるわけじゃないし、思っているだけじゃあなんにもできないけどね。でも、できることは、たくさんある」

がたごと、がたごと。と、虎狐と私は電車に揺られていた。平日の昼間だからだろうか。車両は私の想像以上にがらんとしていて、柔らかな日の光が満ちていた。そんながらんとした車両の中で、私たちは身を寄せ合うように座っていた。

「だからって無理するよね。虎狐ってよくこんなことするの？」

「いや別に。まあ、たまにならするけど……無理なこととは思わないかな。この程度」

でも、中学生の行動力じゃあないよな。と思う。

自分の作った限界。

それが何なのか、はつきりとは言わなかった虎狐だけど、廃墟で再会してからすぐに、駅で待ち合わせと言って、虎狐は一旦帰宅した。三十分後、廃墟の近く、私の姉が通っている高校の最寄り駅で、私達は合流した。そして「合唱コンクールの努力賞」と称し、虎狐のおごりで、突然日帰り旅行に行くこととなり、私たちは電車に揺られているわけである。

だから私はすでに、自分の常識から大きく外れているような状態で、限界と言えば、十分に超えている。近所で遊び歩いている生徒を先生は注意するかもしれないけれど、まさか電車に揺られて遠出して遊ぶ生徒がいるとは思わないだろう。

「それで、この後どうするつもり？ 簡単な計画くらいあるんでしょ」

「ごめん、今日のあたし、ノープランなんだ」

「え、まじ……」

「訂正。今日のあたし、ノーブラなんだ」

「ちよ、ちよっと！」

「今日のあたし、マーク・ノップレーなんだ」

「……誰？」

しかしまあ、再会直後に比べると、なんともテンションが高い虎狐を見て、安心させられている私であった。私もだいぶ虎狐に釣られてテンション上がったし。

「……まあ、いいや」

実際、ここまで常識から外れてしまうと、けっこう色々なことがどうでも良くなってしまふ。

「今が幸せだから、別にいいや」

深く考えることもなく、自然に漏れた感想だった。

「そっか。あんたがそういうなら、あたしも幸せだな」

そう、私たちはいつも、複雑に考えすぎる。複雑に考えて、利口ぶって、勝手に自分を常識で囲み、限界を作る。でも、幸せとか、本当に大切なことってというのは、もっと単純で、もっと気を楽しんで、シンプルに行動しないと得られないものなんだ。

そしてきつと、そんな生活の中にこそ、私の求めるものはあるのだ。

番匠虎狐は、宣言通りノーブラだった。

「前宙返り三回半蝦型！」

最後に一花咲かせようとするような、夏を思わせる陽光が、海面に乱反射してきらきらと輝く。そんな光る波間の中へ、親切にも技名を叫び、虎狐は崖から飛び込んでいく。

家を出た時点で、虎狐は水着を着込んでいたらしい。レジャー用のお洒落なものではなく、学校でも使えそうな競泳水着。水着の下にインナーは付けているのかもしれないけれど、いわゆるブラは付けていなかったようだ。

電車で揺られて一時間ほど。たどり着いたのは、海だった。知る人ぞ知るクリフダイビングのスポットらしく、当然、虎狐はそれを知ってやって来た。

（つまり、ノープランを訂正したのは嘘じゃなかったのか）

と、どうでもいいことに感心しつつ、私は虎狐の飛び込みを見守ることに専念した。飛び込みという未知の競技に自らが参加することに、興味を持たないでもなかったけれど、崖の先端にいつてみると、その高さは立ってみるだけでかなり恐ろしい（これでもまだ低いらしいが）。しかも、その高さから海に飛び込むというのだから、ちょっと私にはできない。

そんな理由もあって、私は虎狐が用意した浮き輪を持ち、万が一に備えて待機していた。幸い気温は十分だし、波も穏やかだけど、それでも危険を伴うスポーツだ。遊泳期間外だから、いざつてときに誰も助けてくれないし……。

「くそー。さっきの惜しかったなあ。たぶん」

私の心配をよそに、ダイブを繰り返して、そのたび海面に叩きつけられる虎狐。ちゃっかり私のぶんの水着も用意してくれた虎狐だが、サイズがけっこうギリギリだったので、私は着

替えることなく遠慮した。

「静佳もやればいいのに」

何十回と失敗を繰り返し、飽きたのか、疲れたのか、虎狐は私の隣に腰を下ろす。

「これ、痛くないの？」

隣に座る虎狐は、よくみると身体のあちこちが赤くなっていた。晴れ上がっているという程ではないが、これは明らかに……。

「失敗するとめっちゃ痛い。よくこんなことポーツにしようなんて考える人がいたよね」

見た目や発言内容と裏腹に、虎狐の口調は弾んでいた。

「そんなスポーツ私に勧めないでよ」

「だって、せっかく水着用意したじゃん」

「水着って……これねえ」

単純にサイズがキツかったという理由もあるけれど、私に用意された水着は虎狐が使っているものとは違い、セパレートタイプ。間違いなく学校では使えない露出の大胆なものだった。真夏の海水浴シーズンであれば、周囲に溶け込んで多少は抵抗なかっただろうけど、今のほぼ貸し切り状態の海で着るにはかなり勇気がある。正直、下着で外を歩いている気分。虎狐は気を利かしてお洒落な方を私に残してくれたのかもしれないけれど……。

「あーあ。飛び込みでそれ使えば、間違いなく『水着が流されたー！』ってシチュエーションになると思ったんだけど」

「ちよっと！ それがこれを私に貸そうとした理由なの？」

「まあまあ。私が使ってるタイプと違って、股下がスッキリしてるから、飛び込みはしやすーいと思うよ？」

「流されちゃったら全然嬉しくないっ！」

「ごめんごめん。本当は、身長的にそっちじゃないと無理かなーと思ったのが理由」

「ほんと？？」

「本当」

ときどき、冗談なのか本気なのかわからなくなる。

「まあ、身長差は無視できても、スタイルの差で結局無理か。あんた、顔の方は幼い感じだけど、スタイルはけっこう良いからね」

「う、うん……」

その点については、女の子として、元アスリートとして、色々と複雑な想いがあった。

「あれだよ、あれ。えーっと、えーっと……何だっけ、ロリ巨乳ってやつ？」

「人が気にしてることをっ！」

そういうの、本人はけっこう気にしているんですけど。というか、巨乳といわれるほどにはスタイルよくないよ。たぶん。

だいたいそれを言うなら……。

「なに？ あたし？」

私の視線に、虎狐は素早く気付いた。待っていたのかという程だった。

虎狐は、学年で男子を含めてもトップクラスの高身長。そして、ある種モデル並に無駄がなく、スレンダーな体つきで……だからようするに、いろいろと私のサイズと合わない。

「あ、もしかしてあたしの胸のこと心配してくれてるの？」

「あ、いや……別に……」

仕返しとはいえ、流石にそこを攻めるのは差別的かなあ。

「ふっふっふ。安心なさい。こんな言葉知ってる？ 『貧乳はステータス異常だっ！』って」

「……………」

完全な差別発言だった。

「それ、薬とか時間経過で治ったりする？」

「んー？ 神父様に治してもらおう。とか？」

「どうやって……」

「お金払って……揉んでもらうとか？」

「どんな危ない神父様よっ！」

明らかにインチキ宗教の神父様だ。

ザ・乳神父。

「虎狐さあ。頼むからヤバイ勧誘とか宣伝には引っかからないでね」

「だいじよぶ、だいじよぶ。詐欺師みたいのにはけっこう騙されてきたから」

そういう人が一番危ない気もするけど、私はそれ以上ツツコミを入れようとは思わなかった。

電車で遠出して、初めて訪れる土地にいても、前と変わらず馬鹿やっつけられる。そんなことに心地よさを感じる。ほんの何時間か前には学校で時間を虚しく過ごし、姉と喧嘩して家を飛び出した。そのことが嘘のように、こうしていられる。

それだけで、もう十分。お釣りがくるくらいだ。

「……よし、じゃあもういっちょよくか」

虎狐は立ち上がり、再び崖の先端を目指す。

その先にあるのは、果てしない海だ。この海に向こうには果てしなく世界が広がっていて、そこには見たこともない人がいて、その人の数だけ、色々な考え方があつた。

虎狐はきつと、直ぐにそこまで行けるだろう。

でも、私がそこへ辿り着くのは、ずっと先の話になるのかもしれない。

けどそれは、けっして悪いことではない。今度こそ、無難な技で無理のない着水を果たした虎狐を見て、私は自然と、そんな気がした。

一仕切り海で過ごし、陽が傾く前には、適当に近くを散歩した。

波の音を聞きながら海岸沿いを歩き、それからふらりと市街地に入る。たまに、見つけたお寺や神社を、とくに信仰心もないけど参拝してみたり、お腹が空いたら、いかにも地元のお店ですつとここで、ご当地的なものを買って食ってみたり、修学旅行の気分。

そうして、虎狐に先導されていくうちに、私はふと、彼女がこの街を訪れた理由を思った。なんというか、私の前を歩く彼女の足取りが、旅慣れてるとか、事前に情報を集めていたとか、それだけとは思えなかったからだ。

そもそも、私と思いがけず再開した直後に、こんな旅行プランを立てられるものだろうか？ そんなことを考えていたのが悪かったのだろう。駅前で、事件は唐突に起きた。

「悪い。金が尽きた」

ふらりと私の近くから離れた虎狐は、帰ってくるなり切り出した。

「……え？」

思わぬ一言に、自分のものとは思えない声が出た。

「いや、だからさ。金が尽きた。いや、正確にはちよつとくらい小銭は残ってるんだけど、せいぜい帰りの交通費。しかも、一人分だね」

あ。これが受験勉強で出て来た「晴天の霹靂」とかいうやつかな。と、納得して数秒後。

「えええっ！」

やっぱり納得できない。

「いやー。ちよつと想定外だったよ」

という、虎狐の言い分だが、私が目を離れた隙に、残っていたお札を勢いで全額募金してしまつたらしい。

「……虎狐ってそんな慈善活動家だったっけ？」

「いや別に。全くと言っていいほど違う。でもさ、子供がいたから」

「子供？」

「そうそう子供」

私たちだって、世間的には子供だろうに。

「なんていうのかな。まだ小学校に入ってもなさそうな子供だったけど、だからこそ『正義は実在するんだっ！』って教えてやりたくなった。私の数千円で、あの子が正義に目覚めるのなら、それって安いもんだと思わない？」

「それはそうかもしれないけど……」

後先は考えて欲しい。

なんとも間抜けで、安っぽい正義だった。

「虎狐って、けっこう子供好きなの？」

「いや。どちらかと言えば嫌い。うるさいから」

バツサリ切った。手刀の振り付けとともに。

「赤ん坊とか出すCMとかは特に嫌いだね。赤ん坊が可愛いって思う本能を利用してるころがずるい」

「可愛いとは思うんだ」

ちなみに、好きな宣伝文句は（当社比）らしい。自分をライバルにして精進している姿勢が、格好いいんだとか。

「で、どうすんのこれから」

「まあ、なるようになるでしょ」

そう言っつて、私に小銭の入った財布を、虎狐は突き付ける。

「これ、あんたの分」

「虎狐はどうするのよ」

「あたしはいいんだよ。どうせ明日も学校サボるし。歩いて帰れないこともないから」

「よくない！ 全然よくないよそんなのっ！ だったら私、走って帰る。元陸上部なんだから」

驕られっぱなしの挙げ句、そこまで迷惑かけたくない。

「ほおう。あんた、あたしに脚で勝つ自信あるわけ？」

「そ、それは……もちろん」

「もちろん？」

「……………」

比べたことないし、虎狐がまともに走ってるのとこ見た覚えはないけど、勝てる気はこれっぽちもなかった。

「ああもう。いいわよ。そんなに言うなら預かってあげる。預かるだけだからね」

「素直でよろしい」

虎狐はにこりと頷いた。

勝てないなあ。やっぱり。

同い年なのに、先輩と後輩みたい。

まあ、勝つ気もなければ、勝負する気もないんだけど。

「で、これからどうするわけ？ とりあえず、行けるとこまで一緒に歩いて帰る？」

「うーん。まあ、それもいいかもしれないけどねえ」

と、言いながら虎狐は笑顔で首を傾げる。

演技らしく、それでいて、わざとらしくない、虎狐特有の仕草で。

「とりあえずそこ。寄っててく？」

そういつて、虎狐が指差した先に、私は希望を見いだせるかと思ったが、そこにあったのは、何の変哲もない、市街地の公園だった。

「昔々、あるところに幸せを求めて旅をするお爺さんがいました」

「え、何唐突に？ 昔話？ 主人公お爺さん？ 『幸せの青い鳥』とかじゃないの？」

「いいから聴けって、あたしが小さかった頃、何度も家で聞かされた話だよ」

私は虎狐に導かれるままに公園に立ち寄り、ベンチに座った。小さい子供が野球をするには程よい広さの公園で、住宅地のご真ん中という立地条件ではあるが、普通に話をする限り、近所迷惑になることもない。日はすでに家々の向こうに隠れ、真夏を思わせていた熱い空気も、秋らしさを取り戻しつつある。蛍光灯の白い光が、スポットライトのように私たちを照らしていた。

「お爺さんと言えども、昔は当然子供で、旅に出たときは青年だったんだけど……あ、昔のお爺さんって、たぶん今で言う四十くらいなんだって」

「そうなの？」

「ちなみに、私たちも後五年もすれば年増女」

それは知りたくなかったなあ。

「……で、お爺さんは？」

「あ、そうそう。昔は子供で、旅に出た頃は青年だったお爺さんは、世界中を旅して、幸せを見つけようとするうちに、気付いたらお爺さんになってたわけ」

「ふーん。で、幸せは見つかったの？」

「うーん。それは微妙だね。見つけたと言えば、見つけたし、見つからなかったとも言える」

「はつきりしない昔話ね。作者は誰？」

「昔話なんて、作者不明が普通じゃない？ 日本のとか特に」

「幸せ探して世界中を旅とか言ってる時点で、あんまり日本産じゃなさそうだけど……で、結局幸せは見つかったの？」

「お爺さんが見つけたのは、神様でした」

「……………」

「あつ、ちよつと今いい加減な話してると思ったでしょ？ これ、あたし小さい頃に何度も聞かされたんだから、絶対間違えてないって」

まあ、その辺は別に疑ってもないし、疑ったところでどうしようもないと思うけど。

「神様は言いました『お前は何で幸せを探しているのか』と」

「人の心も読めないなんて、あんまり万能じゃない神様ね」

「お爺さんは言いました『それは、幸せの意味を知るためです』と……」

昔話というのは、どれも哲学的な要素を含んでいるのかも知れないけれど、虎狐の語る昔

話は、やはり少し変わったものだった。

お爺さんは幸せの意味を知るために、世界中を旅してきた。そして、色々な人と出会って、色々な生き方を見て、色々な幸福の形に触れてきた。大富豪になること、仕事に活かすこと、家族を愛すること。平和な国でも、戦争のある国でも、幸せの形はどこか似ていて、そして同時に、同じ国の中でも違う形をしている。

どうしてお前は幸せの意味を知るために世界を旅してきたのか？ 神様の問いかけに、お爺さんは答えた。それは、人々を幸せにするためには、人々の幸せを知る必要があるからだ。そして、私の人々を幸せにしたいのは、私の幸せが人々の幸せにあるからだ。と。

お爺さんは、どこかの国の王子様だったらしい。でも、戦争で国同士が衝突し、多くの人が死んでいく中で、本当に民を幸せにするためには、何が 필요한のか、それを真剣に考えて、彼は国を出た。国が幸せを感じるのではない。幸せとは、人間が感じるものなのだ。それが彼の信念だった。

彼に感心した神様は、彼にチャンスをおあげました。もしも、お前が望むのであれば、私がお前の選んだ者を幸せにしてみせようと。

しかし、そこには条件があった。

幸せの総量には、限りがある。

それはとても簡単なルールだが、それ故にお爺さんはとても悩むことになる。

世界中の人に均等に幸せを分けるべきか？ しかし、そうすれば、一人あたりの幸せは少なくなる。神様が言うには、その場合の幸せはとても些細なもので、日々の幸せに敏感な人でなければ、気付くこともできないらしい。それに、今にも死にそうな人にまで幸せを与えて、何かいいことがあるのだろうか？

だったら、幸せを与える相手を選別すべきか？ 例えば、世界一の善人に幸せを全部渡して、世界中の人を助けてもらうべきか？ 世界一の権力者に幸せを全部渡して、世界中を平和にする制度を作ってもらうべきか？ 世界一の賢者に幸せを全部渡して、世界を正しく導く知恵を出してもらうべきか？

お爺さんは世界中を旅して得た経験と知恵を総動員し、懸命に案を考え続けた。失業者全員に幸せを与えてはどうだろう？ そうすれば、飢えや貧困にあえぐ人が減らせるかもしれない。低所得者を幸せにするのはどうだ？ 中間層が増えれば消費も活発化して、景気は上向くだろう。反戦主義者で幸せを分けあうのは？ 反戦主義者が幸せということは、その世界に戦争はないだろう。

そしてふと、お爺さんは閃いた。

そうだ、未来だ。

未来に希望を持つことができれば、人間はきつと幸せに生きていける。

遙か未来へ向かう誰かが幸せならば、きつとまわりの人達も幸せになれるに違いない。

幸せは、未来の世代へ譲るべきだ。
だから、お爺さんは言いました。

この世で最も残りの寿命が長い者に、全ての幸福を与えてください。と。
「で、どうなったの？」

「『ふおっふおっふお。世界一寿命が長いのはこのわしよ。だから幸せは全てわしのじや』とか言っつて、神様だけ幸せになりました。お終い」

「ひどっ！」

なんだそりゃ。

「だから、世界からは貧困も戦争も恨みも妬みもなくならないし、幸福な家庭は数少ない。経済なんていくらか成長しても、人間が幸せを感じられるような暮らしにはならないんだよっつて、昔から聞かされてきた」

「凄い家庭環境ね」

虎狐がこんな風に育った背景が、なんとなくわかった気がする。

「まあ、酷いオチなんだけどねえ。あたしはこの話。けっこう好きなんだ」

「なんでよ」

「静佳。あんただったらどうする？ 幸せをどうわかる？」

「……それは、即答できないね」

「でしょ」

そう言っつて、虎狐は空を仰ぎ見た。気付けば、暗くなった夜空には星が瞬き始めている。

「きつとね。即答できる人も中にはいる。それが良いことかはまた別だけど、そういう人もいる。実はあたしもその一人」

だと思っつた。

「でもね、静佳。あたしの答えが一年後、いや、明日だっつて、同じとは限らない。きつと、そのくらいこれは答えを見つつけるのが難しい話で、答えなんてない話で、だからこそ、貧困も戦争も恨みも妬みもなくならないんだっつて思うんだ。でも、そんな人間を、きつと私は好きでいるべきなんだっつて思う。それこそ、神様みたいにね」

虎狐は笑う。

私へ力を与え続けていた、あの笑顔で。

その笑顔は、もしかしたら彼女なりの、誰かに与える幸せの形だったのかもしれない。

ねえ、虎狐。いったいどこまで虎狐は考えていたの？

未だにあの時、虎狐がどこまで何を考えていたのか、私にはわからない。

でも私は、彼女からそれを聞き出す気もないし、その必要性も感じない。きつとそれは、彼女が必要だと思っつたとき、必要なだけ私に語りかけてくれる。そういうものだから。

そう思っていたからこそ、私は彼女を深く追求しなかった。彼女の趣味、彼女の日常、彼女の信条、彼女の家族。そういうえば、彼女がどんな風にクラスで過ごしていたのかさえ、私は全く知らなかった。

昔話を聞かされて、そこにどんな意図があったのか、あるいはなかったのか。考えることはいくらでもできた。でもそれも、きっと私を感じて、考えるがままで十分だった。言葉にしくなくても伝わるのか、そういうものではない。ただ、本当に訊くべきだと思ったことを、きっと私は訊いてしまうし、虎狐も本当に話したいと思ったことは話してくれる。だから、必要性を感じなかった。

暗闇の中に街灯の光だけが浮かび上がるようになって、私たちは公園に残っていた。帰りたいと、思わなかった。

このままずっといたい。それが無理だとわかっている、あと一秒でもいいから、こうして続けたい。私のそんな思いを知ってか知らずか、虎狐は無理に私を帰そうとはしなかった。

なんと危ないことをしていたのだろうと、今なら思う。深夜のランニングとか、私はこの後も懲りず、夜中に出歩く十代後半を過ごしていたけれど、本当に、よく今まで生きてこれたと思う。

虎狐は違った。夜出歩くことは同じでも、常にその危険性を認識し、その上で出歩いていた。だから、私と話しながらも、同時に周囲に気を配り、いつでも行動できるようにしていた。

喋り疲れた私は、虎狐にもたれるようにして、少し無言の時間が続いていた。

ああ、眠くなってきた。

このまま眠れたら、幸せそう。

あ、幸せってそういうものかな？

そんな寝ぼけた私の頭を腕で支えた虎狐は冷静で、闇の向こうを見据えていた。

唐突に、虎狐が立ち上がる。

必然、私は倒れ込み、軽くベンチに頭をぶつける。

「った！ ちょっと何？」

「よう」

私の言葉にこたえたのは、いや、私の言葉にこたえたわけではないだろうけど、若い男の声が聞こえた。

状況が飲み込めない私に、鋭く、冷静に、虎狐が言う。

「行け」

気付けば、ベンチの正面、公園の出口に何人かがたむろしていた。いや、そいつらはまさに現在進行形で、近付いてくるところだった。

これは、たぶん、危ない。

虎狐には逃げようという気配が全く無く、そいつらの方へと踏みだす。

「わ、私も……」

恐る恐る、一歩前に踏み出す。瞬間、虎狐が振り向き叫ぶ。

「行けえっ！」

見たこともない虎狐の表情に、私は、今まさに迫り来る集団以上の恐怖を覚えた。

が、私が一歩退いたのを見て、虎狐は笑顔に戻り、ぐつと親指を立てた。

「……さよならだ」

私は走った。

公園の反対側、そっちに出口があるかは分からないが、正面と同じ作りなら、柵は高くない。ハードル走の選手でも、高飛びの選手でもないけれど、障害にはならないと判断した。これでも元陸上部だ。そう簡単に走りで負けるつもりはない。

……そう、そうだ、私は陸上部だったじゃないかっ！

そんな当たり前の事実を思い出し、私は恐怖からくるものとは別の興奮に包まれた。

この時ほど、私は陸上部だったことを喜んだことはないかもしれない。

きつと、あのまま残つても、私は虎狐の足手まといになるだろう。でも、私は陸上部だ。

それも、長距離選手。全力で駆け回れば、近くでコンビニくらい見つかるだろう。そして、コンビニの前には、公衆電話が置かれている可能性が高い。

助けるんだ、虎狐を。私の脚で。

闇夜の住宅街を私は懸命に駆けだした。まさに、疾風。自分でもそう思うほどの速度で、その速度を落とすこともなく、全力で走った。現役時代のどんな大会も、内申点がかかった重要な実技テストも、ここまで全力で走れた覚えはない。

虎狐の力になれること。その興奮が疲労も何もかも吹っ飛ばした。

そう、何もかも。

ここで、幾つかの誤解や、失敗がある。

まず第一に、本当に緊急事態であれば、私は近隣の家飛び込んで助けを求めるべきだった。それを吹っ飛ばし、自分の脚の活躍を優先したのだから、本末転倒である。

次に、私はこの辺の地理に全く詳しくない。そんな状態で手当たり次第に走れば、当然大幅な時間のロスに繋がる。事実、私がコンビニを見つけ、運良くそこにあつた公衆電話を利用するまでに、十分以上は経過していただろう。

そして、電話に出て気付いたのだ。

「そちらの住所はどこですか？ 目印になるものとかありませんか？」

全く、わかるわけもなかった。

ガチャリ。と、それ以上相手の話も聞かず、受話器を降ろしたときには、私はもう混乱し

きっていた。

せめて今から戻って住所を……そう思つてふと気付く。手当たり次第に走り回った私は、さっきまでいた公園の場所が、完全にわからなくなっていた。

疲れがどっと押し寄せた。

結局、私は虎狐の言った通りに逃げただけだったのだと。虎狐を助けることができなかったのだと。悔しさに涙を流しながら、それでも私は公園を探して歩き回った。皮肉にも、公園の方角を知ることができたのは、パトカーのサイレンの御陰だった。

そして、それから更にだいぶ遅れて、公園に到着し、しかしそこには警察官も、虎狐も、あの男も誰もいなかった。

闇の中で、点々と、赤黒い染みが砂利にまじっていることだけが、この場で何が起こったのかを物語っていた。

そういえば私は、一度も虎狐に感謝を伝えられなかった。そんなことをふと思った。

流石に怒られた。

終電に間に合い、なんとか帰宅は出来た。でも、無断でそんな時間まで出歩いたことは、到底許されることではなく、無茶苦茶怒られた。でもそれ以上にショックだったのは姉のこと。私の家出を心底心配していたことが、その憔悴しきった顔から覗えた。きっと、口喧嘩の責任を感じて友人とか、学校とか、もしかしたら警察とか、色々なところに助けを求め、奔走してくれたのだろう。あんなに時間を惜しんで勉強をしていたのに、いざとなったら私のために全力を尽くしてくれる。そんな姉の行動を思い、私は自分が思っていた以上に、色々な力に助けられていることを知った。

私には怒ってくれる両親と、本気で心配してくれる姉がいる。そんなにも心強いものはない。こつてり怒られたはずなのに、私は不思議と明るい気持ちになれた。

問題は、虎狐のことだった。

両親の話聞く限り、家に連絡は来ていないらしい。警察が公園に向かっていたのなら、もしやと思ったのだけれど、少なくとも、私の家には連絡が入っていなかった。

翌日、焦燥に駆られ早く家を出て、学校を目指した私は、しかし、そこに彼女の姿を見つけることはできなかった。学校中を聞き回ったが、欠席しているという情報しかなく、それは、ある意味で最悪の事態には至らなかったという意味であり、私は一旦胸を撫で下ろすことができたけれど、不安を完全に拭い去ることはできなかった。

そして、その不安が現実になったのは、休日を挟み、五日も経ったときのことだった。

毎日のように、顔を出していた虎狐のクラスに行ってみると、私が尋ねるより先に、言い渡された。

「番匠さん。転校したみたい」

何事もなかったように、最初からいなかったように、クラスメイトの一人は私にそう告げた。

そういえば、初めて虎狐と出会ったあの日、別れ際に彼女はこう言った。

『まあ、一ヶ月くらいの短い期間だけど。その間よろしくね』

彼女と出会って、もう一ヶ月が経過していた。

7

私と彼女が一緒に過ごしたあの頃の話は終わってしまったが、最後に、その後のことも話しておこうと思う。

合唱コンクールの一件でクラスから浮いてしまった私だが、まあ、そんな状態が延々と卒業まで続くわけもなく、気付けば私はクラスの一員として、元の位置に戻っていた。

きっと、彼女の言っていた通り、いい頃合いになっていたのだろう。

「ぎゃーっ！ まじごめん静佳っ！ ゲーム学校に持って来たら、先生に取り上げられちゃったっ！」

とか、教室に飛び込むなり馬鹿の神崎が私に土下座し始めたのは、なんてことない普通の昼休みのことだった。「はあ？」と、突然のことに間抜けな声をあげた私だが、理解するなり取っ組み合いの喧嘩を神崎に挑む。そしてそれを、いつの間にか集まってきたクラスメイトが囃し立て始め、先生が仲裁に入る。息を荒らげ、内心神崎を罵りながらも、気付けば、私は私の日常は戻っていた。あの妙な疎外感のあった日々は、この一件であっさり終わりを告げ、ああ、そういえば、終わりっていうのは一瞬なんだなと、ふと思った。

今になってみると、あれは、神崎なりの気遣いだったのかもしれないし、あの時率先して囃し立ててくれたのは、トモちゃんとチサトだった気もするけど、つまりは、私たちはみんな、もっと仲良くしたかったのだ。

特別なものである必要はない。ただ、日々馬鹿なことをやって過ごし、なんとなく楽しい。嫌なこともあるけれど、それも含めて、ああ、良い学生生活だったなあと思える。面接官には認められないかもしれないけれど、それが十分私の学校の生活の思い出で、全く恥じることもない。この頃になって、私はようやくそのことに気付くことができた。

高校受験に向けて、勉強はまじめに頑張った。

彼女と私の関係は、きつとほとんどの人知らないのだと思う。でも、彼女に関わって、それから墮落してしまったように思われるのは嫌だった。だから、彼女のためにも私は全力で頑張れた。そんな私を見たら、彼女はどんな風に思うだろうか？ 励ましてくれるだろうか？ それともあの笑顔を私に見せて「馬鹿だねえ」とでも言うだろうか？ そんなことを考えながら、私は勉強する日々が、楽しくてしょうがなかった。

真面目に勉強を再開したのは、既に十一月が近かったから、それなりに苦勞したけれど、先生達も驚くくらい、私の成績は急速に伸びていった。やっぱり姉妹だねえ。私の姉を知る先生達は、口を揃えてそう言った。

そうそう。姉は、第一志望の名門国立大の法学部に合格し、家を出て行くことが決まった。それからというものが、急に穏やかになった姉だが、一方である種の子供らしさも戻っていた。それは、もしかしたら、大人だからこそ出来るものだったのかも知れないけれど、あまり嫌なものでもなかった。そう感じられるようになった私も、一方で大人になっていたのかもしれない。

「ごめんね。脳が筋肉だから、筋トレしたら頭良くなるなんて言っただけ」

受験を控え、それでも虎狐と出会ってからランニングを習慣づけていた私に、既に受験の終えた姉が言った。

「誤解を招くと恐いから、一応忠告しとくけど、適度な運動はむしろ学習にいいんだよ。記憶のメカニズムの問題なんだけど、まず海馬に……」

詳しいことは覚えてないけど、なんとも姉らしい、妙な忠告だと思った。

そんな忠告を受けたおかげか、私は第一志望の高校、私立白金高等学校に合格した。私立ということ、学費がけっこう心配だったけど、姉が入学していた影響で、私には割引きが適用されるし、姉が国立大に進んだ御陰で、学費は十分捻出できるらしい。

特別な進学校というわけではないけれど、都心からも地方からも受験生が多い。だから多種多様な考え方に触れることができる。部活動もけっこう活発で、将来に向けて幅広い経験と知識を身につけるには最適。それが志望動機……と、いうのは表面上のもので、私は別の目的で、この学校を選んだ。

あの廃墟。彼女と過ごした場所が、見える場所だから。

誰にも言うことはないし、きっと誰にもわからないだろうけど、私の本当の志望動機は、それだけだった。受験直前まで、学校の名前を「しろがね」と読むべきか「はつきん」と読むべきかも知らなかったくらいだし。

そして、合格発表からの短い期間。受験の勉強からもプレッシャーからも解放され、夏休み以上の開放感の中で、私たちは遊び回り、世間では「無為」と言われる宝物のような日々を過ごし、最後の日を迎えることになった。

やっぱりなあと思ったけど、泣くことはなかった。

練習通り、淡々と式は進み、私たちは卒業へと向かっていった。

三年間過ごした校舎と別れることは感慨深いものがあつたけど、それは涙を流すようなものではない。きっと、ここは次に入学する人達が、たくさんの平凡でいとおしい日々を送る場所だから、私は次へ進んで、ここを明け渡すべきなんだ。そんなことを思った。

私立への進学となった私は、同じ高校へと一緒に進学する人が少ない。その数名も、ほとんど付き合いない人達だった。でも、会いたくなったら、別れた人ともまた会える。トモちゃんもチサトも、あの神崎だって、その気になれば私は会いに行ける。全く寂しくないと言えば嘘だけど、私たちの過ごした、この空間、この空気に比べれば、別れが惜しいとは思わない。

それに、会えないというならば、私にとって、彼女以上の人はいないのだから。

期待は全くなかったけど、粛々と進む式の中、私は彼女の姿を探した。

きっと彼女なら、この場所に姿を現すようなことはしない。心の片隅で、そのことはわかっていた。でも同時に、彼女がこの機会を逃すわけがない。あの演出好きの彼女が、この舞台を逃すわけがない。

だから、私は絶対に注意を怠ってはならない。それは式の最中に限らず、その外であつても。

しかし、結論から言えば、注意を払う必要なんか、全く無かった。

軽い騒ぎが起きていた。

それは、祝電を張り出しているボードの前に、人だかりができていることから一目瞭然で、そしてそこには、卒業生全体に対するエールの中に、明らかに何者かが追加で貼り付けた長い長い手紙があった。

『屋上で出会ったあなたへ』

って宛名で誤魔化してあるけれど、冒頭をちょっと読んだだけで、明らかにそれは私に宛てられたものだとわかった。

私は迷うことなくその手紙をボードから外すと、周囲の言うことも耳に入らず、自分の教室に戻ることもなく、気付けば屋上へと向かっていた。そして、寒さを気にすることもなく、出口にある段差に腰を下ろした。

彼女と出会ったあの日のように。

『屋上で出会ったあなたへ』

よう、元気か？

あたしは元気だ。どうせもうあんまり心配してないだろうけど、安心して欲しい。

面倒な挨拶は省こう。時候の挨拶なんて、あたしは得意じゃないから。

さて、何から話すべきかな。いや、何を話すべきかな。

考えてみると、色々と話すべきことはあると思うんだけど、まあ、まずはこれを言わなきゃいけないだろうってのは、あんたと別れる前から思ってたんだ。

ごめん。

ごめんなさい。

何度言っても言い足りないと思うけど、あたしはあなたに謝らなくちゃならない。

何でかなんてとぼけないでくれよ。なんとなく気付いてるだろう？

あなたと初めて出会ったあの日、あたしはあなたを追っ払おうとしてた。

大体考えてみなよ。突然近付いてきて、「いいねえ練習中の合唱は」なんて言い出す奴、気持ち悪いだろう？ 正直な感想だったのは確かだけど、あたしだったら近付きたくないね、そんな奴。

……ごめん。また誤魔化した。

ほんとに誤らなくちゃいけないこと、言わないとな。

あたしは、あなたの合唱なんか、これっぽっちも興味なかった。

もう気付いているだろう？ あたしはあなたに会ったとき、もうこの学校を辞める予定だったんだ。だから、クラスの練習だってサボってた。まあ、別れは予定より早くなったけどね。

でも初めて会ったあの日、あなたの悩みを聴かされて、私も考えがちょっと変わったんだ。あなた、このままでと中学生生活の思い出が作れないまま卒業してしまうって、焦っていただろう？ あれ。あたしからすれば、凄いい見だったよ。

だってもうどうせ終わるんなら、誰かと思いで作ったり、変に期待したり、させたりしない方が、ずっと楽だろう？ 少なくとも、あたしはそう思ってた。

でもあなたは違ったな。あなたは終わりが近いことを自覚した上で、最後に思い出を作ろうともがいていた。

だからあたしも、少しだけ興味を持った。

もしかしたら、あたしの失敗をあなたなら克服できるかもしれない。

あなたが克服してくれば、あたしもあの失敗を取り戻せるかもしれない。

だからこそあたしは、あなたに協力することにしたし、途中からは協力を惜しまなかった。なあ、ちよつと長くなるかもしれないけど、少し昔の話をさせてもらってもいいか？

あなたはあたしと初めて出会ったとき、あまりあたしのことを知らなかっただろう。

当たり前かな。あたしは三年生になってから転校してきた身分だから。

なんで三年なんて時期に転校してきたのかって？ それは娘想いのご親切な親御さんのおかげさ。

年齢不詳の暴力コンピ。

狼と狐の兄妹。

そんな風と呼ばれてたっけなあ。

まあ、安心してくれ、これ以上の妙な通り名とか、あたしにはないから。

ただ失礼なもんだね。身長でかくて強いつてだけで、年齢不詳とか言いやがって。

十三、四の女にのされる男共が悪い。というか、弱い。

あんな、確かあたしに初めてあったとき、こう言ったね。

不良。

びっくりした。まさか、転校前のあたしを知ってるのかって思った。

要するに、あたしはまごうことなく、不良だったんだよ。

ま、昔ながらのね。

強きを挫き、弱きを助くってやつ。

中学上がった頃からかな、兄貴と一緒にしょっちゅう出歩いて、喧嘩に明け暮れてたよ。今にして思えば、不思議だね。あのムカツク兄貴と、あんなことだけでは気があつた。

そんな兄貴が、高校卒業と一緒に、日本全国、放浪の旅に出た。

たぶん計画はしていただろうね。でも、あたしにも両親にも、弟にも言うことなく、置き手紙一つで旅行にでやがったんだ。

あたしは必然、一人で取り残されたわけ。

じゃあ、一人で今まで通りの活動をやるか？ それは無理だ。少し考えればわかる。いくら強くても、女一人でやり続けられる活動内容じゃあない。それに、あの兄貴はただ強いだけじゃなくて、情報戦にも長けていた。あたしは所詮。その点でも中二のガキ。

でもな、だからって直ぐに丸くなれるもんでもないんだよ。

たった一年でも、夜出歩いて暴れ回った習慣は抜けるもんじゃあない。

で、鬱屈とした力の矛先は、どこへ向かったと思う？

生徒会選挙。

まあ、当選する気は無かったけどね。

あたしのいた学区は典型的な格差社会だったんだよ。そうなるとな、当然治安も悪くなるし、学校も平穩にはならない。煙草なんか当たり前。喝上げ上等。まさかお前が？ って生徒の鞆の中からナイフが飛び出す。頭からバケツで水をかけられたとか、上履きやら教科書やらがゴミ箱から見つかったなんてのは、お笑い程度にしか扱われない。

世界は全然平等じゃあないんだよ。

この国の公教育だって、地域次第。

そこがむかつて、選挙に出てやった。

で、言ってやった。

『お前らみたいなクズ野郎を一掃するために、立候補してやった』

これが案外良かったんだろうな。内心、不満に思っていた生徒も多かったんだろう。

その気なんて全くなかったのに、あたしは生徒会長になっていた。

あなたは、あたしにリーダーシップがあると思うかい？ そう思うなら、まだまだ子供だ

な。

言っておくが、あたしにリーダーシップなんてこれっぽっちもない。

ただ、中学の生徒会なんてのは、決してリーダーシップなんてなくてもどうにかなるんだよ。ちよつと周りより頭が切れて、ちよつとした言葉で全体の思考の方向付けさえ出来れば、細かな政治的駆け引きとか、何かや誰かを切り捨てる決断力とか、スムーズな合意形成のための根回しとか、そんなものはいらぬ。

だからだろうね。あたしでも生徒会長が務まった。思考力のゲームじゃあそうそう負けないし、勉強だって三年レベルまでできたからね。高校の。

だから、徹底的にこり押しした。

要するに制度改革だよ。教員に批判されず、生徒にも真の意味合いを読まれないように、少しづつ絡め取る。メスを入れるべき所は決まっている。先生でも、教育委員会でも、PTAでも踏み込めないところだ。それ以外は、そっちが勝手に動いてくれる。

生徒会長になって、直ぐに効果は現れた。当たり前だけど、非合法の所の取り締まりをするのが一番楽だったね。しかも、そういうところって、けっこう生徒には目立つから、誰の目にもあたしの功績は明らかだった。

三学期も終盤に近づく頃には、少なくとも学校で煙草やナイフを見かけることはほとんど無くなった。それに伴って、テストの平均点も上昇した。一応ね、先生やPTAにアピールすることも兼ねて、あたしが勉強法とか広めてやったんだよ。成績が低い生徒は、そもそも勉強法ってのを知らないものだから。

全て順調だった。

自分でもまさかかっていうくらいだった。

学校では、まさに伝説の生徒会長扱いだった。

でもな、きつとあたし一人ではこうはならなかった。

それだけは、よくわかる。

副会長の服部、柳田、中村、賀田山。会計の石倉、大森。書記の篠原、須川。それに、それぞれの委員の委員長とか、自主的に協力を表明してくれた人達。先生や親御さんにも助けてもらった。私じゃ知らないことを彼らは知っていたし、私にできない駆け引きを彼らはやってくれた。みんな学校を良くしようって、一つの方向に向けて、あたしに力を貸してくれたんだ。

その助けがあったからこそ、あたしはなんとか、生徒会長をやった。

だからあたしは、言ったんだ。

卒業まで。いや、卒業しても。あたしはこの学校の力になる。

人生で一番誇れる思い出を、この学校で一緒に作ろう。

三学期の終業式だったかな。そんな恥ずかしいことを言ったのは。

でも、わかるだろう。

その直後、あたしの転校は決まった。

流石に怨んだね。親を。

それがあたしのことを思った決断だったとしても、怨まずにはいられなかった。

普通怨むだろう？ 全てあたしが播いた種が原因だったとして。

要は、内心だよ。

あたしの不良時代は、そりやもう嫌と言うほど、高校にも知られていただろうさ。なんて
たって、あたしの兄貴も、その辺の高校じゃある種の伝説だったからね。

それに、元から引越しの話があったのも理由の一つ。いずれは地元に戻ろうってのが、
両親の考えだったんだ。

転校を言い渡されてから、そりやもう恐かった。

ただただ恐ろしかった。あたしの力になってくれた人達を、あたしを信じてくれた人達を、
あたしは一方的に裏切るんだなあと思うと、恐くて仕方がなかった。

両親と顔を合わせるのも嫌だったけど、外に出て学校の誰かと顔を合わせるのが恐ろしく
てしかたがなかった。

気付けばあたしは、別れを告げることもなく、あなたのいる学校に転校していた。
それで思ったよ。

もう、どうせこの学校の人達とも長くないんだから、思い出なんて作るのはやめようって。
お金を貯めて、さっさと家を出ようって。

ちよつと長かったかな。これでも手短にまとめたつもりなんだけど。

でも、これでもいいわかったかな。

あの日、放課後の屋上であなたの目の前に飛び降りたあたしが、何者だったのか。
ただ、不足している部分を付け足しておこう。

あなたに会った後のことだ。

あたしはね、あなたに会って成長した。

最初は気まぐれで興味を持って、あなたに協力してたつもりだったんだけどね、あなたに
あてられて、あたしもちよつとは変わった。

見るからに要領悪そうだし、聞いた限り、誰からも期待されてない。

それがあなたの第一印象。

だからどうせ、あたしがあげたトレーニングをやらせれば、あなたは直ぐに音を上げると
思ったんだ。そしたら、あたしが家を出るまで、適当な話し相手になってくれるかなあつて
思ってた。転校してから、友達とか作らないようにしてたから、ちよつと暇を持て余してた

しね。

でもあなたは違った。

あなたは誰からも期待されなくても、黙々と努力を続けてた。ああ、これを愚直っていうんだな。なんて、感心しちゃったくらい。

だからあたしもちよつと気合いが入った。こんなに厳しくしたら、ついてこないかもしれないって思ったこともあるけど、あなたはそれにも応えてくれた。

だから、合唱の結果があんなことになったときは、流石のあたしも落ち込んだんだよ。

今回の結末は、回避できたはずなのに。あたしと違って、あなたはしっかりみんなの前に立てるはずだったのに。こんなことになるなら、最初から手を出すんじゃないかった。

そんなことを考えてた。またあの引越すと、同じ気持ちを味わってね。

ところがどっこい、本人は違ったんだなあ。

クラスメイトを説得するでも、ふてくされて不参加を表明するでもなく、当然不登校で逃げ出すってこともしなかっただろ。ただ、クラスメイトにあわせて練習に参加して、金賞とって、それで終わり。

どんだけ素直なんだよって思ったね。

全く賢くない。というか、愚か。愚かで素直。やっぱり愚直。

でも、そういうあたしにできないことができるから、あなたはやっぱり強いんだよ。

仲直り、できたんだろう？ 結果なんて見なくても、なんとなくわかる。

あなたは、あたしの作っていた限界を超えていったんだよ。

だからあたしは、あなたを連れてあの街に行った。

覚えてるよな？ あのクリフダイビングができる、海のある街だ。

あれがあたしの住んでいた街。

近いだろう。あんなに近いのに、あたしは引越してから一度もあそこへ行ってなかった。

まさか、昔殴りあった奴らと遭遇しちまうとは想定外だったけどね。でもま、それも含めて楽しい旅行だったよ。

あれから、あたしはその足で家出した。

あなたが超えた限界を、あたしも超えてこようと思ってね。

あたしの古巣への訪問は、あっさり受け入れられたよ。

もう生徒会メンバーも入れ替わっていたけど、あの頃の奴らと、今の奴ら、みんなあたしのこと、これっぽっちも怨恨じゃいなかった。

それで気付いたんだ。

あたしだけが、あたしを許せなかったんだって。

みんな、あたしのことをいつも思ってくれてたんだ。

あたしがみんなのことを、懐かしく思っていたように。

なあ、あんたは《思い出》ってなんだと思う？

あたしは、あんたと出会って、そんなことをよく考えてた。

それで、思い出すから、思い出なんだって思ったよ。

誰かがあたしと過ごした時を思ってくれて、あたしもその時を思い出す。他人にはどんなにくだらくても、大切に、思い出せること。きっとそれが思い出なんだって、思ったよ。

なあ、静佳。

あたしはあんたの思い出になれたかい。

そうだったら、うれしいなあ。

じゃあ、またいつか。

番匠虎狐

追伸。今は不良時代のもので、けっこう遠くの家をやっかいになっている。空気も食べ物も旨いし、家の窓からは海が見えて、かなり気に入ってる。そこで譲ってもらったものを卒業祝いにつけておく』

手紙に付けられた小さな袋には、たくさんの種が入っていた。

きつとこれから、未来に向けて育っていく。そういう命。

私はそれを微笑ましく思いながら、袋の口を閉じ、手紙を折りたたむと、教室へと向かう。そこにある、大切な思い出たちのもとへ。

あとがき（といっても、位置が後なだけで、執筆前に書いたものを加筆修正したもの）

ちよつと少年時代を思い出してみよう。

小学一年生。遠足で楽しみにしていたお弁当。しかし、中に入っていたデザート羊羹が溶けていて、弁当全体がともに食べられる状態じゃなかった。泣いた。

小学二年生。一年生と遊ぶという授業が行われる。一年生は緊張しているだろうから、優しく接してあげて、思いっきり楽しませてあげよう。と思ったら、一年生に集団で攻撃された。泣いた。

小学三年生。学園祭のようなもので、釣りの出店があった。その行列に並ぶも、あと一歩の所で割り込まれる。制限時間ギリギリでそいつに竿を渡され、よし次の番こそ釣りを楽しむぞ！と意気込むが、さっきまで釣りをしていたと勘違いされる。弁解するもタイマーを突き付けられ、追い返された。泣いた。

小学四年生。毎年参加している地元のお祭りに行く。小学生になった妹の面倒をみていたら、同級生にからかわれる。妹の面倒を見る手前、反撃ができずにいると、徐々にからかいはエスカレート。とてもじゃないが祭の山車を引き続けることができなくなり、二度とこんな祭に参加するかっ！と決意して帰る。泣いた。

小学五年生。林間学校の最終日。釣りをしていたが一向に釣れなかった。同じクラスで釣れていない生徒がいたので、釣れないね〜と話しかけたら、お前なんかと一緒にするな！俺はお前よりずっと上手いのに釣れてないんだっ！と、猛烈にまくし立てられ追い払われた。泣いた。

小学六年生。再び一年生と遊ぶという授業が行われる。前回同様の失敗はしまいと決意して赴くも、思わぬところに伏兵あり。班の一部が方向性の違いから自分と対立する。気づけば、班員全員から排除され、一年生との交流どころか、誰ともまともな交流がなかった。泣いた。

中学校一年の三学期から卒業まで。もはや虐めともいえないような酷い状態だった。刑務所に居た方が、看守が見張ってくれるだけかもしれませんと思う生活だった。入学直後『中学校で何もしてないのに気づいたら卒業だった』という夢をみて「ああ、夢で良かった」と思ったけど、その夢の方がまじだったという生活だった。私も成長したのだろう。もはや涙は出なかった。

……………。

と、まあ人間は楽しかった思い出よりもつらかったことをよく憶えているものだと思います。

よくよく思い返してみれば、楽しい思い出もたくさんあって、毎日のように笑っていられた少年時代は幸せでした（中学時代以外）。釣りができずに泣いた学園祭もどきだって、その直後にはギャンブルに興じて笑っていたし、林間学校も最後以外は概ね楽しくて、同級生

がりサイタル（おいおいジャイアンかよ）を開いているのに参加したときなんかは、こんな楽しい時間が一生続けばいいと感じていたような気もしています。

そういった子供の頃の間を感懐をしっかりと大切に持ち続けていられることが、子供時代を描写するために大切なんだよなと、改めて確認しつつも、だとすると私に青春が描写できるのだろうか？ という不安感が、今回の作品を描くにあたって拭いきれませんでした。

だって、私の青春なかったもん。

中学時代あれだったから、高校入っても極度の人間不信で、友人が出来たのは（というか、友人と認めていいと心を許せる程度に人間らしさを回復したのは）一年の三学期頃。二年生になっても、自分から友人を作るってことをしなかったから、結局高校時代の友人は一年の時に知り合った仲間と、その関係者のみというありさまでした。

学級委員はやってた。けど、まともに委員会に参加したのは初回だけ。男子と女子で一人ずついたから、学級委員はもう一人いたはずだけど、会話した覚えがありません。基本的に、私が学校に来てる日は全仕事を私が請け負い、私がずる休みしたらもう一人が請け負うという正副の体勢です。

学園祭もまともに手伝ったことはない。部活の方（すなわち、一年からの友人関係）では力を入れてたとも言えるけど、学園祭の部活は、出展を早く終わらせて、閉店したら大いに遊ぶ（部室の中で）ことが目的だったので、部室の外に出ていた覚えがない。体育祭に至っては、一年の時に顔を出しただけ。あとはずる休み。修学旅行も中学時代の恐怖でずる休み！

だから、今回の小説は青春のリベンジ！ という意味合いも込められています。あんな酷い青春の自分でも、青春を描くことができるのならば、きっと自分には自分なりの青春があったんだと、と、納得できる気がしたんです。これも「消えた青春を……取り戻す！」ってやつ……ですかね？（どうでもいいけど、てつをさんの『オレの青春』が頭をよぎるなあ）

さて、作品の話。

本当は、小説を描く上で原作をどう意識したとか、あえてどう変化を入れたのかも書いたのですが、ページ数が増えすぎるので細かいところは省きます。

この作品。実は二つのものが切っ掛けで書き始めるといふ決断を下しました。

一つは虎狐が喋り始めたこと。

「虎狐なんて《虎の威を借る狐》かよって思うだろ？ アホかっつての。絶対子供に付けていい名前じゃねーよ。……でもま、この名前の一番ムカつくところは、名前の由来がそんな諺の意味さえなくって、単に母が虎好きで、父が犬科なら何でも好きだったからってとこなんだけどな」

虎狐は名前と性別だけ設定がある人物でした。たぶん、一年以上はそれだけの存在だったのに、突然話しだしたんです。だから、彼女を描いてあげたくなりました。

虎狐なんて名前付けてごめんなさい。由来はやっぱり《虎の威を借る狐》です。

二つ目の理由は、途中でやめてしまった中学校の仕事。

以前、私は中学校で働いていたのですが（先生じゃないけど）、一年生から見ている学年があと少しで卒業するところで離職してしまいました。

そんなこともあって、もしも彼らに祝電を送るならどんなのがいいかなーと考えていたら、祝電を贈りたくなつて、でも贈れるような立場でもないし（しかも、自分が本気で言いたいことはちよつと過激なので、とてもじゃないけど許可がおりないでしょう）、だったら小説の中で中学生に言いたかったことの一片でも表現できたら、この感情にもけりがつくんじゃないかと思つたこと。これが二つ目の理由です。イマイチ表現できなかったけど。

この『虎狐の存在』と『祝電贈りたい』の二つがあつという間に絡まって、青春描くぞ！という決意でできたことがこの作品の生まれた真相です。

そして、物語を方向付けたのが、『思い出』でした。

私の惨憺たる中学生生活において、比較的ましだった三年生の時期、事務的な会話すらクラス中から避けられていた自分に、席が前後になつたためか、話しかけてくれた人がいます。

実は、自分にとって一番親しいのはその人でした。

周囲には別の人が一番親しいと思われていましたけど、残念。その人は一番嫌いだった人です。当時は、殺したいほど憎んでました（御陰で死なずにすみました）。

で、席がよく前後していたこともあり、よく喋っていた方の人。卒業後は全く別の学校行くし、連絡手段も持たない。だから、きつと一度と会わないのだろうなと思ひ、卒業式の日、校門をくぐってから、やはり二度と会っていません。

でもやっぱり。彼がいたから、自分の中学三年の時期は、少しだけ心が穏やかで、豊かな時間が流れていたのだと思います。

だから、私はときどき彼を思い出して、彼も私を思い出すことがあるのだろうか（つていうか、思い出せよ！ お前だって話し相手俺くらいしかいなかったじゃないかっ！）と、答えが出るわけもないことを考える。それが、今回のテーマとなりました。

そんな自分勝手な都合で作つた物語の作成を許可してくださつた出寫さん、そして、本作の語り部である八重静佳のデザインをしていただいたggさんに、長文駄文のために遅ればせながら、この場を借りて感謝いたします。一ヶ月で書き上げるとか言つて、半年以上かけてごめんなさい。文庫本二十ページ分で抑えると言つて、百ページ近く書いてすみません。

そして、私の無駄の多くしつこい文章を最後まで諦めず読んでくださった方がいたら、可能な限り感謝します！ でも、何も出ません。出来ません。

あ、可能なら次回作出します！（次回、あるのかなあ）